

竹富島方言アクセント(2)

著者	ローレンス ウェイン
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	43
ページ	97-129
発行年	2019-03-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022999

竹富島方言アクセント (2)

ウエイン・ローレンス

1. はじめに

本誌の37号で、竹富島方言の音調型の所属語彙資料をおよそ450語発表するとともに、竹富方言の単語を25語取り上げて、他方言にある同系語の音調との比較を通して、琉球祖語形の音調系列を推論した（ローレンス 2013）。本稿はその続きで、20語ほどを取り上げ、それぞれの音調系列などの解明を試みる（2節）とともに、約700語の音調型の所属語彙資料を公表する（3節）。

竹富方言には音調型が二つあり、歴史的なA系列語彙に対応する竹富島方言形は基本的に平板型（符号の0で表す）であり、B系列とC系列の語彙は歴史的に合流して起伏型（2で表す）で発音される。竹富方言以外の琉球方言の音調型に言及するときに本稿で使用するA, B, Cはその記号が表す歴史的系列に対応するその方言の語形の音調型を表す。例えば、鳩間方言の puuru「プール」の音調はA系列語彙（「口」, 「人」, 「力」, 「^{つぶし}膝」…）の鳩間方言対応形と同じ音調型であるために、puuru A のように記述する。A・CやB・Cは、その方言において二つの系列が合流した結果できた音調範疇を表す。

竹富島方言形の子音は音韻表記で表記し、母音は簡易音声表記を用いる。母音の後のアポストロフィー（'）は音節の境界をはっきりさせるために用いたもので、音素ではない。他方言形は音韻表記を用いる（与那国方言の母音間の [g] を /k/、[ŋ] を /g/ とする）が、伊江島方言で意味を弁別する [si] と [ci] の音韻表記が確立していないため、その子音を [] で囲んで音声表記で示す。

2. 「系列別語彙」決定によせて

本節では竹富方言の単語を20取り上げ、他方言にある同系語の音調と比較することを通して、琉球祖語形の音調系列や語誌を推論する。竹富方言の例は名詞を先に、続いて動詞、形容詞の順に、それぞれアルファベット順に（ə は a, n は n の位置に）並べて扱う。

(a)akeezi ~ (a)ageezi 2「蜻蛉」

鳩間 agocceema /agocci-ama/（平山ほか 1993：3599）、小浜 akeenci（高原 1979：40）、与那国 akidan C（上野 2013：139）、多良間 akeezi C（松森 2010：499）、首里 aakeezuu B・C（国立国語研究所 1963：99）、大宜味村田嘉里 akkeezuu C（ローレンス 2005：74）、伊江島 akeelzi C（生塩 2009：9）などから琉球祖語形としてC系列音調の *akeedu が再建される。上代語形の akidu（上代語辞典編修委員会 1967：8）から察して、日琉祖語の

語形は *akedu であったと考えられる。¹

五十嵐 (2016c : 5) は喜界島赤連の eedaa と沖永良部島知名の eeda を取り上げ、「北琉球に固有の語である可能性があり、したがって、琉球祖語に遡らない可能性がある」としているが、これは何らかの誤解に基づく判断だと思われる。奄美諸方言では、非高舌母音の前に立つ無声破裂音は有気音化し、その有気音が k の場合、しかも直前の母音が非高舌母音の場合、k が h になり、また多くの方言では脱落する。*akedu-a > *ak^heda > *aheda > *aeda > *aida > eeda の一連の変化が考えられ、-a の接尾化以外の変化はすべて規則的である。語末の -a は奄美諸方言にあって、奄美祖語まで遡ると思われる — 佐仁 eezaN (狩俣 2003 : 32), 西古見 iheeda B・C,² 諸鈍 ʔjeeda B・C (狩俣 1996 : 26), 徳之島尾母 エーダ(マ) (徳富 1975 : 20), 与論麦屋東 aakanzja C 「トンボの一種」(菊・高橋 2005 : 15)。この -a は小動物の名称にみられる接尾辞であろう。

bəhu 2 「共同作業」

これと同系の語形は八重山 (石垣 bahu A 「共同作業」(宮城 2003 : 811), 鳩間 bakoo B・C 「共同作業」(加治工 1991 : 100), 古見 bagu B・C 「共同作業」(加治工 2013 : 99), 小浜 bakoo (高原 1979 : 178), 与那国 bagu C 「大勢が集まって仕事を手伝うこと (法事など限られたものを指す)」(池間 1998 : 263 ; 中澤光平氏からの私信)) と奄美の諸方言 (喜界島阿伝 waku 「水田をからすきで鋤くこと」(岩倉 1977 [1941] : 329), 大和浜 waku 「力仕事、特に耕作」(長田・須山 1977 : 662), 西古見 waak B・C 「仕事」³, 沖永良部島皆川 waakuu B 「作物の間の除草」(上野 2006c : 289), 与論麦屋東 waku B 「作物の手入れをすること」(菊・高橋 2005 : 632)) に広く見られるのに対して、宮古方言 (伊良部島仲地 bafu 「農耕すること」(富浜 2013 : 557)) と沖縄方言 (沖縄大宜味村田嘉里 waku B 「除草作業」⁴) の報告例はわずかである。

琉球祖語に B 系列音調 *waku が再建されるが、琉球祖語 *waku B 「杵」との関係の有無は未詳である。

ちなみに、八重山特有の語形 *ssaaku A 「仕事」(竹富 ssahu 0, 石垣 ssaahu A (宮城 2003 : 588), 鳩間 ssaaku (加治工 2017 : 17), 黒島 zaaku (原田 2015 : 52), 古見 ssaku ~ ssagu A (加治工 2012 : 46, 49)) は、意味からしてこの *waku を後部成素として含んでいると推測できる。

geesə 2 「風の卵」

八重山では石垣 geesa B・C (宮城 2003 : 344), 鳩間 keesa B・C (平山ほか 1992b : 2507), 古見 giissan B・C (加治工 1998 : 287), 西表島祖納 geesa (前大 2002 : 168) の諸語形が報告されている。一方、白保や与那国は同系語がないようで、与那国では can-nu

kaigu⁵ (can「虱」, kaigu「卵」)、白保では san-nu turaga,⁶ san-nu kee⁷ という分析的な表現が使われる。

宮古方言として伊良部島仲地 gissa (富浜 2013 : 217), 旧上野村野原 gissa (本村・本村 2014 : 177), 多良間 gisisa ~ gissa C⁸ がある。

沖縄では首里 zicjasi B・C (国立国語研究所 1963 : 598), 城間 zicjasi (城間字誌編集委員会 2003 : 103), 久米島儀間 zicjasi (波平 2004 : 158), 今帰仁 gisaasi C (仲宗根 1983 : 115), 金武町金武 gisasi (池原 2004 : 127), 田嘉里 gisasi C⁴ という語形が使われている。

奄美方言では旧笠利町佐仁 k'jesi (狩俣 2003 : 39), 龍郷町瀬留 k'jasi (狩俣・上村 2003 : 12), 有良 k'essi,⁹ 大和浜 k'jasi (長田・須山 1977 : 876), 諸鈍 gisjasi (高橋 1990 : 107), 徳之島浅間 gigjaasi ~ giigja C (ローレンス・岡村 2009 : 17), 沖永良部島皆川 gisjasi C (上野 2005b : 165), 与論島麦屋東 gisjasi C (菊・高橋 2005 : 162) が報告されている。

八重山祖語形は *geesa < *giasa < *giCasa のようにできたであろうが、二音節目の子音 (C) の特定が問題になる。それが g であるなら、八重山諸方言によくみられる語中の g 脱落の例になるが、二音節目に g がある同系の語形は徳之島に限られている (亀津 gigja C (平山 1986 : 445), 尾母 gigja (徳富 1975 : 26))。徳之島祖語形は *giga(sī) であると考えられるが、八重山との地理的ならびに系統的隔離から、八重山の *geesa は *gigasa の g 脱落形ではないと考える。もう一つ考えられるのは、*geesa は *gisasa から s 脱落によってできた語形であるということである。Thorpe (1983 : 299-300, 327) は *pisa「足」 > *pīsa > *pīa > pee「足跡」の一連の変化を想定しており、同じ *-isa- > -ee- の変化である。

沖縄中南部方言の zicjasi は沖縄祖語の *gisasi C から次の一連の音変化を経てきたと思われる — *gisasi > *zikasi > *zikjasi > zicjasi。この中の *gis- > *zik- は子音の [±声] 以外の素性の音位転換である。¹⁰ 続く -ik- > -ikj- > -icj- は規則的な順行同化 (参照 : 「烏賊」 ika (糸満), icja (首里)) の結果である。¹¹

以上から、琉球祖語、北琉球祖語、沖縄祖語ならびに奄美祖語の祖語形は *gisasi C であり、南琉球祖語は *gisasa C (< *gisasi + -a (小動物名に見られる接尾辞)) で、宮古祖語においてこれは *gisīsa C に転訛したものと考えられる。琉球祖語形は『色葉字類抄』(1177-81年) の「蟻」^{きざし} や種子島中種子方言の kisasi β 型 (琉球語の B・C 型に対応) (植村 2001 : 98) という語形に対応し、語頭の *k- > *g- の有声化は琉球祖語の動物名に広くみられる変化である (*gacucu「海栗」, *gani「蟹」, *gazami「蚊」, *guzira「鯨」参照)。

gii 0「(長い)柄」^え

「柄」を意味する石垣四箇 jui A (宮城 2003 : 1160), 鳩間 jui A (加治工 1961 : 27), 西表島祖納 jui (前大 2002 : 54) など、また与那国の dui A (上野 2013 : 111) から、八

重山祖語に *jui か *joi が再建される。竹富方言では、*jui > *jwii > *wii か、あるいは *jui の j の前舌性と後続する u の後舌性が位置を入れ替えて（音韻素性が音位転換して）*wii ができ、そして w- が不規則的に g- に硬音化したと考えられる。¹²

与論島麦屋東方言では「柄」は hui A（菊・高橋 2005：482）である。麦屋東方言では *wo > hu の音変化が起こった（hunagu「女」、hui「桶」、hudujun「踊る」、hujun「いる」、hutu「夫」など）が、*we に由来する hu（huijun「酔う」、huiga「男」< *wekega）もある。与論島茶花方言では wui「柄」、wuijun「酔う」、wuiga「男」と発音する（山田 1995：2019, 2034）。このことから、麦屋東では hu < *wo < *we で、与論祖語の語形は *wei「柄」であったと考えられる。首里 wii A（国立国語研究所 1963：594）、沖永良部島全地点 ii A（上野 1999：134）、喜界島小野津 ii A（松森 2011：91）、諸鈍 ii A（Serafim 1984：196）は *we か *wei を反映する語形であるが、与論祖語の語形を考慮に入れると、北琉球祖語の語形は *wei A として再建できる。

宮古方言から伊良部仲地 ii（富浜 2013：53）、旧上野村野原 ii（本村・本村 2011：63）、多良間 dii A（松森 2010：497）が報告されている。これらは *je に遡り、多良間方言では *j- が不規則的に d- に硬音化したと見られる。Thorpe（1983：293）は琉球祖語形として *jue か *joe を再建しており、*joe なら八重山の *jui と宮古の *je の前身であると容易に考えられる。

上代日本語の「柄」は je（甲類のエ）で、「枝」と同一語であるとされている（上代語辞典編修委員会 1965：140）。美与之努（万4098）と美延斯努（雄略記 97）がともに「み吉野」を表す語形であることから、上代語に jō ~ je の交替が認められる。「枝」は琉球では *joda系である。「柄」と「枝」が同一語なら、本土語の je「柄」（1類アクセント）に琉球語の *jo- A が対応するのは頷けよう。*jo- の j の前舌性と後続する o の後舌性が位置を入れ替われば北琉球の *we- ができあがる。語末の *-e/-i の出自は不明である。

huki 2「標」

石垣四箇方言 huki（宮城 2003：916）も竹富の語形と同じく B・C 系列音調になっている。

石垣市川平では「フキは長さ二メートルほどの棒か竹に、カヤまたはワラでサンを結んで立てる。[中略] フキは今でいう立札の役目を果たしていた」と説明されている（喜舎場 1981：58）。上勢頭（1976：304）は竹富島の標^{しめ}について「…所有地であることの印として「フキ」（茎）は畑にさしておく」と述べ、huki が「茎」に由来する語形であることを示唆しているが、石垣方言の「茎」が規則的に huki（宮城 2003：916）であることから、この語源説は石垣方言などの huki を説明できない。宮古の例として宮古島狩俣の「[前略] カヤでフキ（一本のカヤの頭の方を三つ結んだサンのこと）を作り畑にさした」（宮城 1966：49）がある。¹³

以上はみな南琉球方言の例であるが、北琉球からは次の沖永良部島和泊町の例（いずれも huki）が方言集に挙げられている — 和泊方言「占有標。そてつ葉・茅等を突き立てる。」（甲 1987：183），国頭方言「占有標」（福島 2010：252）。国頭方言の語形は「花」と同じ音調でB系列音調である。¹⁴

琉球祖語にB系列音調の *puke が再建される。

jattu 0「海底の地形」

これと同系の語形に鳩間方言の jatu A「干瀬の外洋部が内側へ深く切り込むように形成された深い溪」（加治工 1986：5），沖縄本島旧知念村字志喜屋の jatu A¹⁵，伊江島の ja(t)tu A・C「大きな潮だまり」（生塩 2009：514），名瀬市の jado「海中にある珊瑚礁の割目」（寺師 1981：4-35）および奄美大島西古見の jatoo ~ jutoo A「海水の出入りする岩穴」²が報告されている。このことから琉球祖語にA系列の *jato が再建できるようであるが、さらに <丘陵に入りこんだ谷> や <低湿地> を意味する本土日本語のヤト・ヤツ・ヤチとの関係の可能性が浮かぶ。^{16, 17}

神奈川県 の町田市原町田，寒川町，鎌倉市今泉，横須賀市芦名で使われる普通名詞の jato は平板型アクセントで、1類に対応する。¹⁸ 千葉県多古町の普通名詞 jazī「窪地」も1類相当の平板アクセントである。¹⁹ 本土日本語の1・2類名詞は琉球語のA系列に対応することから、琉球語の海底の地形名称と本土日本語の地上の地形名称が同系語である蓋然性はやや高いと思われる。

kumu 0「薦」

この竹富島方言形は石垣 kumu A（宮城 2003：331）と鳩間 kumu A²⁰ にきれいに対応する。北琉球方言でも沖永良部島皆川の humu（上野 2006b：152），伊是名の humuu（伊是名島方言辞典編集委員会 2004：598），久米島真謝の kumu（仲原 1997：62）もみな同じA系列音調である。奄美大島からは龍郷町瀬留の komo が報告されている。²¹ 喜界島赤連の humu はA・B系列対応音調で、小野津の humu はA系列対応である（松森 2011：103）。「薦」は金田一語類（金田一 1974：63）では1類になっており、規則的に琉球語のA系列に対応する。

nuhittu 2「泥棒」

石垣 nusituri B・C（宮城 2003：733），鳩間 nusituri B・C（平山ほか 1993：3593），西表祖納 nusituri ~ nisituri（前大 2002：232, 243），波照間 nusituri（平山 1988：469），小浜 nusituri（高原 1979：173），新城 nusituri（久野真 1992：42），与那国 nusitt'u B（上野 2010：22）の諸語形から、中核八重山方言（与那国方言を除いた八重山方言群）では八重

山祖語のB系列音調の *nusitu が *nusituri に変化したと推定できる。竹富島方言の nuhittu は本土日本語の影響かと思われる。²²

宮古には伊良部島仲地 nusudu (富浜 2013 : 511), 池間 nusidu C (平山 1983 : 780), 多良間 nusidu C (下地 2017 : 234 ; 青井隼人氏からの私信), 旧上野村野原 nusitu (本村・本村 2011 : 294), 旧城辺町仲原 nusitu (城辺町史編纂委員会 1990 : 501) がある。伊良部・池間諸方言と多良間方言という、宮古祖語から比較的に早い時期に分かれた方言が du 終わりの語形を有していることから、宮古祖語形は *nusidu で、他の方言ではこの *nusidu が nusitu に変化したと思われる。

北琉球から首里 nusudu B・C (国立国語研究所 1963 : 427), 伊江島 nu[s]idu B (生塩 2009 : 364), 今帰仁 nusiduu B (仲宗根 1983 : 358), 与論島麦屋東 nusudu B (菊・高橋 2005 : 402), 沖永良部島皆川の nusiduu B (上野 2006a : 46), 諸鈍 nusdo B・C (狩俣 1996 : 24), 西古見 nusudo B・C²³ などが報告されている。

琉球祖語は *nusudo B で宮古の一部の方言と八重山祖語では *-d- は *-t- に変化したが、この無声化は先行する音節 *-si- と関係があると思われる。

nuiru 2 「鋸」

八重山の石垣 nukkirī B・C (宮城 2003 : 737), 鳩間 nukiru B・C (加治工 1987 : 115), 古見 nukiru B・C (加治工 2014 : 172), 小浜 nikkiri (仲原 2002 : 317), 西表祖納 nohiri (久野 1988 : 74 ; 前大 2002 : 247), 波照間 nugerī (平山 1988 : 505), 与那国 nukudi B (上野 2015 : 172) の諸語形から八重山祖語形は *nukugirī B として再建されるようである。与那国方言の語形の前身は語末の ri が脱落した *nukugi であるが、その他の八重山方言形は g 脱落を被った *nukuiiri の形を反映する。

宮古方言から多良間 nukugi C (下地 2017 : 234 ; 青井隼人氏からの私信), 伊良部島仲地 nukazīi ~ nukuzīi (富浜 2013 : 510, 511), 旧上野村野原 nukugi (本村・本村 2014 : 270) が報告されている。

北琉球には首里 nukuziri B・C (国立国語研究所 1963 : 425), 金武 nukuzirīi B (松森 2009 : 116), 今帰仁 noozirīi B (仲宗根 1983 : 367), 伊江島 nohozīi B (生塩 2009 : 370), 与論島麦屋東 noogīi B (菊・高橋 2005 : 409), 沖永良部島正名 noogīi B (松森 2000 : 67), 諸鈍 nohogir B・C (狩俣 1996 : 46), 西古見 nuhogir B・C²³ などがあり、琉球祖語 B 系列音調の *nokogiri が再建される。

本土日本語の中央語では10世紀まではノホギリという発音が使われていたことが知られており、琉球語の *nokogiri がその後の借用語でなければ、日琉祖語形が *nōkōgiri に近い形で、本土の中央部で ノコ- がいったん ノホ- に変化したが、周りに残った旧語形が11世紀から中央語に復帰したと考えられる。いずれにせよ、本土方言において ノコ- > ノホ-,

あるいは逆の ノホ->ノコ- の不規則的な変化があったと認めなければならない。

piizə²⁴ 0「山羊」

八重山ではヤギは次のような語形で表現される — 石垣 pibizja A (宮城 2003 : 885), 鳩間 pibiza A (加治工 1961 : 36), 古見 pibizja A (加治工 1998 : 293), 小浜 pibizja (高原 1979 : 188), 黒島 pisida C (松森 2016 : 70), 西表祖納 piiza ~ pipiza (前大 2002 : 296), 波照間 pimiza (平山 1988 : 646),²⁵ 与那国 hibida C (上野 2010 : 24)。宮古では多良間 pinda C (下地 2017 : 282; 青井隼人氏からの私信), 与那覇 pinza C (松森 2013 : 2), 旧上野村野原 pinza (本村・本村 2014 : 327), 伊良部島仲地 pinza (富浜 2013 : 605) などという。次の例が示すように、南琉球方言の pi は琉球祖語の *pe に対応する。

	琉球祖語 *pi-	琉球祖語 *pe-
仲 地	pīi「日」, pīi「干る」, pīima「正午」, pīni「捻る」, pīdama「火玉」	pira「篋」, pizamī「隔てる」, pingu「垢」, pinaī「減る」
石 垣	pīi「日」, pīsūn「干る」, pīiri「昼」, pīinrun「捻る」, pīdama「火玉」	pira「鉾」, pīiri「縁」, pidami「隔て」, pingu「鍋墨」, pinarun「減る」
与那国	cīi「日」, cirun「干る」, cuma「昼」, cidinka「肘」, cidama「火玉」	hira「篋」, hiri「縁」, hidami「隔てる」, hingu「鍋墨」, hinnarun「減る」

このことから南琉球祖語形として *pebeza が想定できそうである (Bentley 2008 : 236)。音調はC系列のようであるが、八重山の一部の方言でA系列音調になっていることと、黒島方言の音声形の説明は今後の課題とする。

一方では、沖縄方言の伊江島 titizja B・C (生塩 2009 : 294) は *pipiza に遡り、大宜味村田嘉里 piizaa C (ローレンス 2005 : 71), 今帰仁 pīizaa C (仲宗根 1983 : 425), 金武 hiizja C (松森 2009 : 113), 首里 hwiizaa B・C (国立国語研究所 1963 : 235) などとも規則的に同じ *pipiza C に由来すると見られ、これが沖縄祖語形であると思われる。

奄美諸島ではヤギ系の語形が優勢になるが、²⁶ 南では与論島麦屋東の piizjaa C (菊・高橋 2005 : 457), そしてとんで北では諸鈍 hinzja B・C (狩俣 1996 : 45) がある。

次の例が示すように、北琉球方言の pi/hi は琉球祖語の *pi に対応する。

	琉球祖語 *pi-	琉球祖語 *pe-
諸 鈍	hīi「日」, hir「昼」, hīii「髭」, hizii「肘」, hizjar「左」	hwīi「屁」, hwīraa「篋」
今帰仁	pīi「日」, p'jun「干る」, p'iruu「昼」,	piraa「鉾」, piri「縁」, pizii「返事」,

p'inirun 「捻る」, p'iidama 「火魂」	pingu 「鍋墨」, pinaarun 「減る」
伊江島	
tii 「日」, tjun 「干る」, tiru 「昼」,	pira 「窺」, pii 「触先」, pizii 「返事」,
tizi 「肘」, tiidama 「火玉」	pingu 「鍋墨」, pinaajun 「減る」

北琉球祖語形として *pipiza C が再建できると思われる。²⁷

上で八重山と宮古の方言形から南琉球祖語形として *pebeza C が想定されそうであると述べたが、Pellard (2010: 173) は琉球祖語の *e と *i はそれぞれ南琉球祖語の時代にはもうすでに *i と *i になっていたろうと論じている。これに従えば、南琉球祖語形は *pibiza C として再建される。北琉球祖語の *i が琉球祖語の *i に遡るのに対して、南琉球祖語の *i は琉球祖語の *e に遡る。この母音の不一致が問題であるが、南琉球祖語の *pibiza C が北琉球語の *pipiza C からの借用語であるとすれば、この問題はおのずと解消する。南琉球の語形が北琉球語からの借用語であるとすれば、琉球語の内部から琉球祖語形は再建できないことになるが、琉球語の外に目を向ければ、その語源の手がかりが得られる。

日本語のヒツジ「羊」という単語は *pituzi で、琉球語においてその母音 *i-u-i が同化によって *i-i、すなわち *pitizi になったと考えられる。*ti は中央語では16世紀まで ti のままの発音であったが、上代東国方言の一部ではすでに8世紀までには ci に変化していたことが知られている。琉球祖語の前身でも同じ変化が起こったとすれば、*picizi の語形になる。次に、琉球祖語の前身において次の音位転換がおこったと考えられる (㍿ = 重複)。²⁸

$\begin{array}{ccc} *p & i & c & i \quad \mathcal{R} & (= *picizi) > & *p & i & \mathcal{R} & c & i & (= *pipizi) \\ | & & & & & | & & & & & \\ [+声] & & & & & [+声] & & & & & \end{array}$

この変化を仮名に書きなおせば、ピチッ > ピ、ヂ のように捉えることができる。出力の *pipizi に -a が接尾して、琉球祖語形の *pipiza ができあがる。

「ヒツジ」は金田一語類の1類に所属するから、琉球語ではA系列音調が予想される。C系列音調であるのはなぜであろうか。琉球語への借用語であれば不規則的な音調型の対応は説明できるが、別の説明として、琉球祖語の段階で接尾した -a が音調系列をCに変えた可能性もある。与論島麦屋東の musī A「虫」と musja C「虫（幼児語）」という同系語の音調型の違いは後者の説明の証左となろう。

sjoo 0 「生活の知恵, 常識」

石垣 sjoo A「性。性分。」(宮城 2003: 455)と鳩間方言 soo A「正気」(加治工 1995: 219)と同じA系列対応の音調である。沖縄方言も同様にA系列音調のようである — 伊江

島 sjoo A・C「性質。性根。思慮。誠実。」(生塩 2009: 201), 今帰仁 soo A「根性。智恵。誠実。本当。」(仲宗根 1983: 214), 首里 sjoo A「性根。意思。智恵。」(国立国語研究所 1963: 489)。しかし、一方では奄美方言ではB系列音調の語形が多くなる — 諸鈍 sjo(o) B・C「性格」(Serafim 1984: 195), 西古見 sjoo B・C「性。たち。性質。」³, 与論島麦屋東 sjoo B「性質。正気。」(菊・高橋 2005: 263), 沖永良部島皆川 sjoo A(上野 2005b: 197), 徳之島浅間 sjoo A「性分。性格。」²⁹。多良間方言の対応形は sjoo C「性分」³⁰である。

日本本土の「性」は金田一語類の3類(東京 1, 京都 H 1, 鹿児島 B型)に対応するため、琉球語ではB系列音調が予想される。広くA系列音調で現れるのはなぜであろうか。琉球諸語に別の漢語起源の形態素 sjoo- があって、これもA系列である。

首里: sjoogurusi A「本当に殺すこと」, sjookutu A「本当のこと」

与論島麦屋東: sjoogaridamunu A「よく枯れきって燃えやすい薪」,

sjookwaa A「実の子」, sjoomunu A (<正物)<上等なもの>

西古見: sjoomun A「立派なもの」²³

石垣: sjoomuni A「本当の言葉」, sjoonibi A「熟睡」, sjoouja A「実の親」

八重山諸方言、沖縄諸方言および徳之島と沖永良部島の諸方言ではB系列音調の sjoo「性」が、別の形態素である sjoo「正」の影響でA系列音調に変わった可能性がある。

sunu 2「^{つの}角, ^{かど}角」

この単語で面白いのはその意味である。ツノに対応する語形であるが、カドの意味をも表す。鳩間方言では <^{つの}角> は sinu B・C という(加治工 1987: 113)が、sinu という単語に <隅> の意味もある。例えば、bee-nu kuuroo ubujaa-nu sannupaa sinu-na atta「我が家の倉裏³¹は母屋の申の方の角にあった」(加治工 1991: 68)。平山ほか(1992b: 2640)では鳩間の sinu は「シミ(隅)に同じ」とある。石垣方言では cunu B・C「^{つの}角」と別語に cīnu B・C「隅」がある(宮城 2003: 562)が、同系の語形である。古見方言の cunu も jaa-nu cunu「家の隅」, taa-nu cunucunu「田の角々」(加治工 1998: 271)の例から分かるように <隅> の意味を持つ。

西表島祖納方言も cinu「^{つの}角, ^{かど}角」(前大 2002: 91, 217)と二つの意味をもち、与那国方言も nnun B「^{つの}角, 隅」(高橋 1987: 91, 118; 池間 1998: 369; 上野 2013: 120, 123)で、³²池間(1998: 224)に turanuha-nnun「屋敷の寅の方の隅」の例がある。

多良間方言では cīnu ~ nnu「^{つの}角」に <^{かど}角> や <隅> の意味がないことから、³³ 与那国方言を含む八重山方言で <^{つの}角> を意味する語形の意味領域が <^{かど}角> を取り込むように拡張していると結論できる。この意味拡張の共有は与那国方言が八重山方言の一つであることの一つの証拠となろう。

古フランス語の cor(n) は「^{つの}角, ^{かど}」の意味であるが、その語源であるラテン語の

cornū の意味は「角^{つの}」である。これが「突き出たところ」を差すようになり、「かど」を表すようになったとされている。同じようにポーランド語の róg「角^{つの}, かど」に対応するスラヴ諸語の語形（例えば古代教会スラヴ語の rogŭ）は「角^{つの}」を意味する（Buck 1949 : 901-2）。また、日本でも、八丈島方言のツノは <角^{かど}> のほかに、<鼻・庭・箱・膳の隅> を表し（平山ほか 1992a : 1230 ; 1992b : 2638）、八丈島檜立方言では <角^{かど}> を cunokko という（木部 2013 : 110）。

多良間（松森 2010 : 497）および北琉球の諸方言の語形はB系列音調であり、本土語のツノの3類アクセントと合致する。

tocci 2「オキナワシャリンバイ（別名 モッコクモドキ）」

石垣 tukaazī（宮城 2003 : 635）、古見 tukacī（加治工 2001 : 13）はA系列相当の音調で、竹富方言の音調 2 と合わない。竹富方言では toccjāā, toccjēē という指小辞の -ā が付いた語形のほうが優勢で、指小辞つきの語形は規則的に起伏型音調になる（ローレンス 2013 : 10-1）。このために劣勢である tocchi までの起伏型音調に変わったと考えられる。なお、西表島祖納 tukaciki（石垣ほか 2001 : 52）や小浜 tukacikī（高原 1979 : 165）は同系の単語に「木」を意味する形態素が複合語化している。

首里 tikaci B・C（国立国語研究所 1963 : 520）、今帰仁 tikaaci C（仲宗根 1983 : 296）、伊江島 teeci C（生塩 2009 : 301）、与論島麦屋東 kjaaci C（菊・高橋 2005 : 169）、沖永良部島皆川 tiicigi C（上野 2006a : 22）、徳之島浅間 tijaaci C（ローレンス・岡村 2009 : 177）、西古見 tihēc /tihēc/ B・C²、旧笠利町佐仁 tēcī（狩俣 2003 : 74）の諸語形から北琉球祖語形としてC系列音調の *tekaci が再建される。

宮古方言の同系語形は北琉球方言と同じ *tekaci に遡る — 伊良部島仲地 tikacīgii（富浜 2013 : 427）、池間 cikjatigii（平山 1983 : 499）、旧上野村野原 kikjaacīgii（本村・本村 2014 : 167）。³⁴ しかし、上記の八重山方言形はすべて *tokaci に遡るようで、（北）琉球祖語形の語頭の *te- の母音が後舌化したことになる。

与那国の tikuti C（池間 1998 : 193；中澤光平氏からの私信）の第一音節は *te- に対応するが、第二音節は *ku か *ko を反映し、不規則的な母音対応が説明を要する。与那国方言のこの語形も、他の八重山方言と同様に *to- で始まったとすれば、第二音節の *o/u は音位転換の結果として説明できよう。すなわち、tikuti < *tekoci < *tokeci < *tokaci が想定される。波照間ではこの植物は sikoci という（天野 1979 : 50）。語頭の si- は *te- に遡る（比較：「太陽」 sina < *teda；「手」 sii < *te）ことから、波照間の sikoci は与那国方言の前身にあった *tekoci につながると言える。だが、語末の *-ci は波照間方言において -cī になるはずである（例えば fuci「口」、mici「道」、nuci「命」、sicigoci「七月」（狩俣 2008））。このことから、波照間方言の sikoci は与那国方言の古形である *tekoci を、*ci > cī の変化が

起こった後に借入したとみられる。

adaasun 0「こっぴどく叱り付ける」

八重山方言では石垣 adaasin A「叱りつける。どやしつける。」(宮城 2003: 37), 西表島祖納 adasu「とがめいましめる」(前大 2002: 153), 与那国 adaran A /adaras-「懲らしめる(大声で叱りつけるだけでなく、行動で示す意味も含む)」(池間 1998: 11; 中澤光平氏からの私信)が報告されており、宮古には多良間 udaasi A「怒鳴る。大声で叱る。」(下地 2017: 61; 青井隼人氏からの私信), 伊良部島仲地 adaasi「大声でどやす。どなりつける。」(富浜 2013: 23)がある。

北琉球方言では報告例は少なくなり、この語形の北限は与論島のようなである — 首里 adaasjun A ~ udaasjun³⁵ A「声高に叱りつける。どなりつける。」(国立国語研究所 1963: 102, 540), 伊是名 adasun A「怒鳴り付ける。おどす。懲らしめる。」(伊是名島方言辞典編集委員会 2004: 19), 与論麦屋東 adaasjun A「① 痩せおとろえさせる [例: 咳は人を痩せさせる] ② 実りを悪くさせる [例: 台風が吹いて作物の実りを悪くさせる]。」(菊・高橋 2005: 26)。与論麦屋東の語形のこの二つの意味は <(こらしめるために) 痛い目に合わせる> から発展したであろう。

宮城 (2003: 37) は千葉方言に「あだす」(叱る)という方言形があることを指摘しているが、これは「おだす」の誤記であると思われる。房州方言形の odasu「叱る」は千葉県富津市富津、館山市船形、いすみ市大原では1類動詞相当のアクセント(平板型)であり、³⁶ 琉球語のA系列音調に対応する。1類動詞である「威す」と関係がありそうであるが、意味と音形の変化が東関東と琉球列島の二箇所ですべて独自に並行的に進んだと看做さなければならぬであろう。

marubun 0「転ぶ」

南琉球に石垣 marabun A (宮城 2003: 1034), 鳩間 marabun A (加治工 1961: 42), 与那国 marubun A (中澤光平氏からの私信), 多良間 marubi A (下地 2017: 318; 青井隼人氏からの私信)の同系語があり、北琉球方言からの報告例はほとんどないが、わずかに沖縄方言の例として伊是名の marunun A (伊是名島方言辞典編集委員会 2004: 629)³⁷ と平安座の marubun A³⁸ が挙げられる。琉球祖語にA系列の *marob- が再建される。

本土日本語の同系語形として『類聚名義抄』の高高低音調のマロブ(僧中 九三), 京都 marobu H0,³⁹ 高知県 marobu H0 (土居・浜田 1985: 611), 高知県垂生方言 marabu 0 (小松 1977: 96) があって、琉球語のA系列に対応するアクセント類になっていることから、日琉祖語に *marob- (1類) が再建できる。

peerəkkumun 0「痺れる」

この語形に極めて近い関係にある石垣方言の peeracikumun ~ piracikumun A (宮城 2003 : 986) があり、宮城 (2003) も宮良 (1930 : 239) もこの語形の語源を「爪先が^{すく}痺む」としている。宮良 (1930 : 237) は石垣方言と鳩間方言の pee「足の尖端、爪先」の項に、「パン、パイなどと同じく脛の義」としている。ここの「パン、パイ」とはパギ系の単語の八重山での発音である。しかしこの語源説はアクセントの非対応によって否定される。石垣の pee は A 系列対応の音調であるのに、*pagi は C 系列音調である。⁴⁰ 一方、*pisa は A 系列音調の名詞である。その例に喜界島小野津 p^{hi}a (上野 2002 : 8), 徳之島浅間 sjaa-(sjaabira「足の裏」(ローレンス・岡村 2009 : 174)), 今帰仁与那嶺 pisaa (仲宗根 1983 : 428), 金武町金武 hisa (松森 2009 : 114), 首里 hwisja (国立国語研究所 1963 : 241), 多良間 pisa (五十嵐 2016d : 59) があり、すべて A 系列音調である。

鳩間 pensukumun A (加治工 (1961 : 12) では「足がしびれる」とあるが、足でなくてもこの動詞は使われるという),²⁰ 小浜 peericukun「足がしびれる」(高原 1979 : 203), 古見 pisikumi A「痺れ」(加治工 2001 : 41), 白保 pesikumari「しびれる」⁷, 西表島祖納 pisomu「痺れ」(前大 2002 : 159) の例が八重山から報告されている。宮古では、平良 pisacifum (平山 1983 : 624) という、八重山と同じ「足が痺む」系とも言われている言い回しがあるが、伊良部島長浜 pisafum と池間 ssahm [ssaɸm] (ともに平山 1983 : 624) には「痺む」よりはむしろ「組む」か「汲む」が含まれているようである。多良間方言の「しびれる」は pimm (下地 2017 : 291) で、「汲む」は mm である。一見 cifum が fum、そして mm に磨耗したように見えるが、次の北琉球諸方言の語形は変化が逆方向に進んだことを示唆する。

<痺れる>

喜界島阿伝	pirukumjui, sirukumjui	(岩倉市郎 1977 [1941] : 254)
龍郷町瀬留	hiri k'umjun	「足裏が痺れる」 ²¹
有良	hirikui A	⁴¹
旧名瀬市	hirikumjun	(寺師 1981 : 4-47)
西古見	hirkumjur A	(富山 2015 : 200) ⁴²
大和浜	hirikumuri	(長田・須山 1977 : 213)
諸鈍	hirju(ku)mjur	(高橋 1990 : 167)
徳之島浅間	sirukumjun A	²⁹
沖永良部島皆川	hirukumjin A	(上野 2006b : 147)
与論島麦屋東	pjuukumjun A	(菊・高橋 2005 : 477)
伊是名	hwirukumun A	(伊是名島方言辞典編集委員会 2004 : 572)

大宜味村田嘉里	pirukun	(宮城 2000 : 130)
今帰仁村与那嶺	p'iruu A kumin A	(仲宗根 1983 : 451)
伊江島	tiru A kunjun B	(生塩 2009 : 297)
金武町金武	hirukumin A ⁴³	(池原 2004 : 340)
平安座島	hirakumun A ³⁸	
久米島儀間	hirakumun	(波平 2004 : 293)
首里	hwirakunun A	(国立国語研究所 1963 : 293)
久高	pirugumin	(福治・加治工 2012 : 107)

中古日本語にヒルム「麻痺する。しびれる。萎える。」という動詞があつて、琉球語の語形はその語根と同系であろう(直江 1978 : 190)。しかし、ヒルムが金田一語類の2類動詞⁴⁴(金田一 1974 : 70)であるために、琉球語の語形の音調型と合致しない。東京語の悲しい 0, 悲しむ -2; 怪しい 0, 怪しむ -2 の例のように、派生動詞形成素の -m- が1類動詞を2類動詞に変えるのと同じ現象が中古語まで遡るなら、語根が琉球語のA系列音調に対応する1類である可能性が生じる。

奄美大島方言の一部では hiru- > hiri-, 沖縄中南部方言では hwiru- > hwira- の不規則的な音変化が起きたとみられる。なお、宮古諸方言の pisa-/ssa- は、<足>ではなく、沖縄中南部方言で起こった変化と並行的な *piru- > *pira- が起こって、次に *pir- > *pīr- > pīs- という規則的な変化が起こったと考えられる。⁴⁵ このように *piru-kum- は宮古だけでなく、南琉球祖語において *pisa-fum- になったであろう。*pisa- が「足」と解釈されたと同時に fum- の本来の意味が失われたので、fum- に意味を与えるために発音のやや近い cikum-/cīfum- に変化したと思われる。

su(n)gurun 2「竹などの弾力性のある物で殴る」⁴⁶ suurun 0「しごく」

八重山から石垣 sungurun B・C「むち打つ」, suurun B・C「こきとる」(宮城 2003 : 475, 484), 鳩間 sungurun A「なぐる」(加治工 1961 : 49), 西表島祖納 sunguru「叩く」(前大 2002 : 200), 白保 sunguri「叩く」, su(g)uri「こく」⁷ の語形が報告されている。元来同じ語形 *sugurun が、片や八重山でよく起こる g脱落を受けて suurun になり、片や意味を強調するために撥音が挿入されて sungurun という別語ができたのである。

宮古から多良間 sīvvi「殴る。しごく。」(下地 2017 : 163)、北琉球から首里 sugujun B・C「しごく。なぐる。」(国立国語研究所 1963 : 496), 今帰仁 sugurun B・C「鞭などでなぐる。しごく。扱く。」(仲宗根 1983 : 204), 伊江島 [s]igujun C「(竹・鞭・ロープなど撓う細長い物で)ピシッと叩く。ひっぱたく。ぶん殴る。しごく。」(生塩 2009 : 216), 与論島麦屋東 sigujun ~ sugujun C「しごく。殴る。叩く。」(菊・高橋 2005 : 272), 沖永良部

島皆川 sizjun B・C「棒や鞭で叩く。叩いて脱穀する。」(上野 2005b : 201), 徳之島浅間 sġujun B・C「鞭などで叩く。殴る。藁の下葉などを取り除く。」,²⁹ 西古見 sġukjur B・C「しごく」²³, 喜界島阿伝 sunnjui「鞭や縄のようなもので撲る。又は藁をすぐる。」(岩倉 1977 [1941] : 136) が報告されている。

琉球祖語形として sugur- C が再建される。

uzumirun 2「目覚める」

石垣方言 uzungi(ru)N (宮城 2003 : 142), 鳩間方言 uzunkun B・C (加治工 1961 : 52), 黒島 uzunkiru「夜中などにふと何かの拍子に起きる」⁴⁷ はいずれも *ozomi-kir- を反映することから、竹富方言の uzumirun は沖縄からの借用語であると思われる。沖縄方言の今帰仁 ?uzumin B・C (仲宗根 1983 : 63), 伊江島 ?uzunjun C (生塩 2009 : 77), 首里 ?uzunun B・C (国立国語研究所 1963 : 574) などとも <目覚める> という意味である。

奄美方言の語形として龍郷町浦 ?uzumjuri, 宇検村湯湾 ?uzumjui (以上 重野 2011 : 61 に基づく), 大和村大和浜 ?uzumuri (長田ほか 1980 : 320), 瀬戸内町諸鈍 ?udumjur (高橋 1990 : 87), 喜界島 ?udumjui ~ ?udunjui (岩倉 1977 [1941] : 52), 徳之島尾母 ?udumui (徳富 1975 : 17), 沖永良部島正名 ?udumimu (van der Lubbe 2016 : 157), 与論麦屋東 udumjun C (菊・高橋 2005 : 110) が報告されている。奄美方言のこれらの語形の多くは <目覚める> の尊敬動詞として使われるが、これは奄美方言に限られた用法のようである。

五十嵐 (2016a : 10) は日本語の *ozom- に関して、<恐れる> が本来の意味で、琉球方言と九州方言にある <目覚める> の意味はそれから変化してできたものであると述べている。だが、これと別の解釈がありうるのではないかと思う。「驚く」という動詞の原義は <意外なことに会って心の平静を失う> 意で、目が覚めているときには <はっとして気づく>, 眠っているときは <目が覚める> 意になる (宮腰ほか 2011 : 247) とみられる。同様に、*ozom- の原義は <安静から離れる> であったと考えられまいか。

ōōsjən 2「気分が悪い」

石垣 oomasaan B・C (宮城 2003 : 187), 鳩間 amusan (加治工 1960 : 14), 黒島 aumasan,⁴⁷ 古見 aumahan B・C (加治工 2014 : 158), 白保 oomahan (狩俣 2008 : 91fn) はいずれも <気分が悪い> の意である。

奄美方言では同系の語形に旧笠利町佐仁 agooka (< *aguma-ka)「眠い」(狩俣 2005 : 16), 龍郷町瀬留 agumasa「眠たい」(狩俣・上村 2003 : 20), 旧名瀬市有良 agwaasja「眠い」⁹, 旧住用村西仲間 agumasja「眠たい。(仕事等を) やりたくない。」(屋村 2013 : 86, 109), 西古見 akmasja B・C²³「眠い。つらい。面倒くさい」(富山 2015 : 4), 諸鈍 akmasja「つかれて眠くなる。眠い。いやになる。」(高橋 1990 : 68), 徳之島浅間

agumaahai B・C「やりたくない。眠い。」,²⁹ 沖永良部島皆川 agumasjan「ひだるい」B・C(上野 2005a: 10), 与論島麦屋東 agumasjan B・C「大変である。苦しい。」(菊・高橋 2005: 22) がある。

沖縄方言の全方言では、この語形の *-gu- が不規則的に -N- になっている — 首里 anmasjan (国立国語研究所 1963: 117), 今帰仁 anmasen B・C (仲宗根 1983: 31), 伊江島 anmaasja C (生塩 2009: 39), 田嘉里 anmahan B・C (宮城 2000: 14; ローレンス 2005: 81)。宮古では伊良部島仲地 anmaasikam (富浜 2013: 51) と多良間 anmasjaar⁴⁸、それに与那国方言の anmasan (高橋 1987: 27) と喜界島阿伝 anmasai (岩倉市郎 1977 [1941]: 24), 志戸桶 anmasai (中本 1978: 58) も *-gu- が -N- になっているということは、これらの語形が沖縄方言からの借用語であろうことを物語っている。

琉球語の *agumasi- は^{あぐ}倦むの形容詞形に相違ない(直江 1978: 168; 富山 2015: 4-5) が、動詞語幹 + -asi の語構成(例えば:^{やま}疾しい, 忙しい, 気遣わしい)は、おもろさうし巻13の795のほこる「喜ぶ」と首里の hukurasjan「喜ばしい」の対以外に琉球語に例をほとんどみない。このために、*agumasi- を本土語からの借用語とみた方が良いと思われる。

3. その他の竹富方言アクセント資料

竹富方言の漢語系数詞の音調型は次の語形から読み取れる。

icizi 2「一時」; nizi 2「二時」; sənzi 2「三時」; juzi 0「四時」; guzi 0「五時」;
rukuzi 2「六時」; sicizi 2「七時」; həcizi 2「八時」; kuzi 0「九時」; zjuuzi 2
「十時」; nənzi 2「何時」

以上の範列から、ju-「四」, gu-「五」, ku-「九」が平板型であることがわかる。また、junhun 0「四分」と kjuuhun 0「九分」の語形から jun-「四」と kjuu-「九」も平板型であることもわかる。sii「四」は起伏型である。しかし、次の月名をみると、この分類に反する語形が存在することが分かる。

songəcci 2「一月」; ningəci 2「二月」; səngəci 2「三月」; singəci 2「四月」;
gungəci 2「五月」; rukungəci 2「六月」; sicingəci 2「七月」; həcingəci 2「八月」;
kungəci 2「九月」; zjungəci 2「十月」; naakki 2「十一月」; kənəkki⁴⁹ 0
「十二月」; nəngəci 2「何月」

平板型のはずの gu-「五」と ku-「九」で始まる月名が起伏型になっているのは、語中の -N- という形態素のためである(ローレンス 1997: 13-14)。このことをさらに明確に示すのは、-N- が介入しない「九十」のみに平板型音調が現れる次の数詞の音調である。

ninzjuu 2「二十」; sənzjuu 2「三十」; sinzjuu 2「四十」; gunzjuu 2「五十」;
rukunzjuu 2「六十」; nənənzjuu 2「七十」; həcinzjuu 2「八十」; kjuuzjuu 0
「九十」; hjaaku 2「百」; sinpjaaku 2「たくさん (< 千百)」

普通名詞 (アルファベット順)

ādāi⁵⁰ 2「軒の端」; ādgui ~ əməgui 2「夕立」; aahu 2「担い棒」; aarəsimuci 0「蒸し餅菓子の一種」; aasə 2「ヒトエグサ (海藻)」; əbəri 2「難儀苦勞」; əbərihitu 2「苦勞をする人」; əbərisjaa 2「苦勞ばかりしている人」; əbəsubu 2「油壺」; əccə 2「父親」; ədən 2「アダンの木」; əgi 0「陸地」; ai 0「東」; əissi 2「槌」; əjəturi 2「綾取り」; əjoo 2「歌謡の一種」; əkəbənaa 0「仏桑華」; əkəkəməbu 0「赤かまぼこ」; əkkəi 2「木製の汁用杓子」; əkkəru 2「襖」; əkon 0「薩摩芋」; əkondərə 0「梯梧の花」; əngāā 2「旧盆に行われる芸能の一つ」; ənmə 2「母親」; əppə 2「祖母」; ərəmāi 0「新米」; ərəssahu 0「初仕事」; ərəssahu 0「きつい仕事」; əsəkənnə 2「朝の雷」; əsərigo 2「潮干狩りや漁」; əsəūnu 2「朝ご飯」; ətə'əmi 0「にわか雨」; ətəbui 0「にわか雨」; ətai 2「屋敷内の畑」; ətu 2「後, 跡」; ətutuzi 2「後妻」; əu 2「連れ, 伴」; əzə 2「植物の棘」; əzəi 2「大きな二枚貝の貝殻」; əzəiguru 2「小さな二枚貝の貝殻の総称」; əzəriəkon 0「表面が凸凹の薩摩芋」; əzi 0「味」; bəhucjoo 2「共同作業やお祝いのために贈られた物品を記録する帳」; bəkitturun 2「長方形の膳」; bən 2「番」; bənəhəziri 0「願解き」; bəppəi 2「間違い」; bəsinutui 0「鷺」; bəsju 2「場所, 時」; bəsjubəsju 2「時々」; bətə 2「腹」; bətəkusi 0「へそくり」; bətəkusjāā 2「ちょっとしたへそくり」; bee 0「父親」; biicjaa 2「酔っ払い」; biijōō 2「ヒヨドリ」; biimussju 2「藺草でできた筵」; biirukjoodai 0「男兄弟 (姉妹から見て)」; boo 2「棒」; booda 2「イロブダイ」; bukki 2「桶」; bukkun 2「打ち身」; bun 0「神に供える特別な供物」; bungəsja 0「クワズ芋」; butu 0「夫」; buu 0「紐」; buubə 2「おば」; buzjəsə 2「おじ」; cici 2「節祭り」; cicikəzirə 2「ヒメノアズキ (蔓性植物)」; cicimacuri 2「節祭り」; cin 2「黒鯛」; cizi 0「頂」; cizi 0「より悪いこと」; cjoocindooro 2「セイロンベンケイの花」; dəberə 2「糸瓜」; dəburu 2「脹脛」; dəikku 2「大工」; dəissjəi ~ dəikusjəi 2「胡坐」; dakki 2「芋などを潰して餅にしたもの」; dee 0「代価」; deehwə 2「播り鉢」; dongumun ~ dongumunu 2「仏前に供える供物」; durubutta 2「泥まみれになること」; duu 2「体; 自分」; gaa 2「根気, 意地」; gaarə('izju) 2「ロウニンアジ (魚)」; gaarətui(naa) 2「雀」; gaasisinə 2「撚り合わせた縄」; gəbə 2「垢」; gəbəra 2「大きい木槌」; gənkətəmihitu ~ gənkətəi(ru)hitu 2「龕を担ぐ人」; gənkən 2「オオイタビ (植)」; gənpəku 0「棺桶」; gənzjuumunu 2「健康な人」; gərəsiməgəi 2「下脚の筋が強張り、動けないこと」; gəsi 0「飢饉」; gəsi 2「鎌」; gəsikətə ~ gəsikətāā 2「蟻螂」; gessə 2「片足跳び」; gidəsə 2「陸蟹」; goo 0「五」; guməkui 2「小さな声」; gurōō 2「牛が牽く車; 車輪」; guru 0「殻」; gurukun 2「タカサゴ (魚)」; guzjēəkəməbu 2「お祝い用のかまぼこ」; gwən 0「願」; gwənəhudui 0「願解き」;

gwənnici⁵¹ 2「元日」; gwənsu 2「位牌に宿る先祖」; haaməmi 0「小豆」; haatidə 0
 「かんかん照りの太陽」; həcigumi 2「おこし」; həcimaa 0「初孫」; həcimunu ~
 həcimun 0「初物」; hədərāā 2「ヤクシマイワシ」; hədərə'izju 2「ヤクシマイワシ」;
 həmui 2「蛤」; hənəkki 2「風邪」; həndəi 2「テーブル」; hənsu 2「アキノワスレ
 グサ」; hassəbi 0「メギス(魚)」; həte 2「畑」; həzici 2「刺青」; hii 0「碑」;
 hitu 2「土産」; hubi 0「首」; hudəccube ~ hudəccuberāā 2「ヤモリ」; hudusi 2
 「箴」; hugərə 2「クロツグの幹などを覆う繊維」; hugərəzina⁵² 2「クロツグの幹など
 を覆う繊維でできた縄」; hui 0「陰囊」; huin 2「ホウキモロコシ」; huinguru 2「モ
 ロコシを収穫後の茎」; huke 2^{ふいご}「鞆」; hukkāā 2「風船」; hukoi 2「碑礫貝の一種」;
 hunbu(t)tu 2「フクギ(植)」; hunki 2「フクギ(植)」; hurumai⁵³ 0「大晦日の夕食」;
 hutəi 0「額」; hututtu ~ hituttu 2「針千本」; huu 2「幸運」; huuhui 2「大きな陰囊」;
 huussu 2「真っ赤な嘘」; huuzjə 2「独身男性」; huzo 2「煙草入れ」; ibi 2「霊石が
 あるところ」; ibi 2「軒」; iijəci 2「こねて作る餅の一種」; iijəcidaa 2「こねて作る
 餅の一種を載せる台」; iipen 2「しゃもじ」; ikədə 2「筏」; ikidāā ~ ikidāā 2「生き
 魂」; ikiui 2「勢い」; inərjə 2「小さい鎌」; inookəzi 0「竜巻」; ipe 0「位牌」;
 irijuu 0「必要」; iru 2「鱗」; iru 0「西」; itəbi 2「イヌビワ」; itəndə 2「ただ、
 無駄」; itəndəhətərai 2「ただ働き、徒労」; itəndəssahu 2「ただ働き、徒労」; isiusu 0
 「石臼」; isigənpərəhəte 0「石ころが多い畑」; isjerāā 2「石ころの多い土地」; isju 0
 「潮干狩りや漁」; isjūūsi 2「動物」; jaana 2「童名」; jəbu('isjə) 0「藪医者」;
 jəcjo ~ jəcju 2「お灸」; jəgusəmi 2「未亡人」; jəhwərəə 0「病弱な人」;
 jəhwərəhwaa 0「病弱な子」; jəkkon 2「薬缶」; jəku 2「厄」; jəkubərai 2「厄払い」;
 jəmətukoo 2「線香」; jəmui 0「災難」; jənəokki 0「悪い天気」; jənəzirə 0「嫌な顔」;
 jərəbi 2「子供」; jərəbu ~ jəroo 0「テリハボク(植)」; jəsju 0「食糧不足」;
 jəsuri 2^{やすり}「鑢」; joi 2「祝い」; juccuru 0^{えつり}「棧」; jugəhudusi 0「平和な年」; jui 2「夕
 飯」; jui 2「労働交換」; junaarə 2「底が板の籠」; junen 2「夕方」; junəngətə 2「夕
 方ごろ」; junonbu 0「ヒトエグサに似た種の海藻(不食)」; junonhitu 0「与那国の人」;
 juntə 2「労働歌」; juntəzirəbə 2「労働歌」; junuhitussi 2「同年齢」; junuku 2「はっ
 たいこ」; junurjə 2「一周年」; junuūnu 2「同じ物」; jurəsi 0「篩」; juugərəsi 2「五
 位鷺」; juugərəsjāā 2「五位鷺」; juuhuru 2「お風呂」; kaanə 2「テングサ」;
 kəbirə 2「蝶々」; kəci 2「縦糸」; kəcjorə²⁴ 0「痰」; kəhikki 2「赤飯」; kəhu 2「幸
 運」; kai 2「ゴマアイゴ(魚)」; kəi 0「楔」; kakkubi⁵⁴ 2「革帯」; kəməbu 0「か
 まぼこ」; kənihuzi(i) 2「砂土の多い土地」; kənitiđə 0「かんかん照りの太陽」;
 kənoosi 0「金属製の掘串」; kəntuinaa 2「石敢当」; kərəsuni 0「裸のままの脛」;
 kərui 2「縁起の良いこと」; kəsi 2「加勢」; kəsi ~ kəci 2「粕」; kətosi 0「梳き櫛」;

kəttərə 2「家蜘蛛」; kəttjuunu 0「おかず」; kəzəə 0「鍛冶屋」; kəzəgu 0「鍛冶屋
 (狂言で使う言葉)」; keerə 2「皆」; kicugwən 0「結願祭」; kiimusi 0「毛虫」;
 kiipəi 2「田んぼを耕すために使われる木製の鋤」; kinzjəkkuni 0「人参」; kisə 2「先
 刻」; kissu 2「薪拾い」; kizə 2「(動物の)脚」; kizu 0「傷」; kjangi 0「イヌマ
 キ(植)」; kjūūsi 0「煙」; kkə⁵⁵ 2「(短い)柄」; koi 2「肥料」; kokki 2「ご馳走」;
 koo 2「甲イカの骨」; koo 2「香」; koonēē 2「男の子」; kubə 0「ビロウ(植)」;
 kubən 0「神に供える供物」; kubasə 0「ビロウの葉で作った笠」; kubəsaa 0「貝の一
 種」; kubin 2「びん」; kujumi 2「暦」; kuməmi 0「緑豆」; kumui 2「海中の深み」;
 kuncu 0「根気」; kungāā 2「小さな卵」; kunkāā 2「木の実」; kusju ~ kucju 2「唐
 辛子」; kūūci 0「床の間に供える供物」; kuuni 2「豚の角煮・大根・人参などが入っ
 たおつゆ」; kuurāā 2「^{くるぶし}踝」; kuurōō 2「家の隅っこ」; kuuru 2「台所の味噌・醤油
 甕の置き場」; kuuru 0「ソメモノ芋の根」; kuzi 2「去年」; kuzi 2「乾燥澱粉」;
 kwaasi 2「お菓子」; kwaasja ~ kwaasjə 2「拳骨」; maamunu 0「本物」; mənəzi 0
 「同じ程度」; mədumədu 2「所々」; məiəriziru 0「米のとぎ汁」; məihunaa 0「利
 巧で働ける者」; məiziru 0「米のとぎ汁」; məju 2「眉」; məkon 0「ヤシガニ」;
 məndərə 2「十字型の糸繰り車」; məndərəhəbu 2「トカゲの一種」; məndərəmici 2「十
 字路」; mənontə 0「俎」; mərəsi 0「束」; matə 2「十字型の石臼台」; meemitti 2
 「再来年」; meesjēē 2「昼食」; micci 2「稲光」; miidusi 0「新年」; miijəzi 2「蚯
 蚓」; miikəngən 2「水中眼鏡」; miiməi 0「新米」; mikkəmunee 2「内緒話」;
 minaaguru 2「二枚貝以外の貝殻の総称」; mingoi 2「思慮, 注意力(否定形と使われる)」;
 mingui 2「^{しゃこがい}俣貝の大きい物」; minguru 2「木耳」; minsubu 2「耳が付いている壺」;
 mirukudusi 0「豊年」; mizikətəmihi 2「水を汲み運ぶ者」; mizikuzjāā 0「ほうふら」;
 mizingəi 0「口の大きい水瓶」; mizingoi 0「水肥」; mucjanee 2「米と粟の団子」;
 mumi 0「籾」; mumigərə 0「籾殻」; mumu ~ mun 0「桃」; mumukkeerə 0「百回,
 多数回」; muni 2「言葉」; murun 2「^{もろみ}醗」; mussju 2「筵」; nāā ~ nāmə 2「今」;
 naaīcjə 0「翌日」; nāākki 2「お焦げ」; naakkijoi 2「十一月の祝い」; nāā(n)
 dəninbi 0「不十分な睡眠」; nāā(n)dənmi 0「半熟」; naarə 0「貴方」; nāāssube 0「ヤ
 マヒハツ(植)」; naazə 2「土間」; nəbə 2「茸」; nəbi(hi)kki 2「鍋敷き」;
 nəbissərikəzə 2「鍋が焦げついた時の臭い」; nəciāāgui ~ nəciəmāgui 0「夏の夕立」;
 nəcjoərə 2「海人草」; nədə 2「涙」; nədəsi 2「ハイキビ(植)」; nəkə 2「仲」;
 nəməizju 2「鮮魚」; ngi 0「刺さる木の破片や魚の骨」; nici 2「熟」; niinui 0「居
 眠り」; nin 2「念」; nissu 0「入札」; nnnui 2「芋の団子」; nnnumusi 2「芋虫」;
 nudu 2「喉」; nuubirə 2「野蒜」; okkən 2「独身女性」; oo 2「豚」; oobəgutū 0「余
 計な事」; oobəmunu 0「余計な言葉」; oobəzin 0「無駄金」; oonəi 0「嫉妬」;

oonæzi 2「サキシマアオヘビ」; oonæzi 2「虹」; ootæi 0「田虫」; ootæi 2「青竹」;
 ottæ 2「蛙」; paa 2「菌」; paamunu 2「刃物」; pæhuki 0「溢血器具」; pæn 0「印,
 印鑑」; pæntæ 0「先端」; pæræ 2「柱」; pee 0「足跡」; pee 2「綜統」; pen 2「しゃ
 もじ」; penki 0「正坐」; pentenmaaru 0「爪先立ち」; pidæ 2「波打ち際」; pidiru 0
 「日照り, 旱魃」; pidiru ~ piziru 2「傷跡」; piijaasi 2「ヒハツモドキ(植)」;
 piisængujæð 2「鳥肌」; pikkæræ 2「蛍」; pikkêê 2「杼」; piru 2「へり」;
 pijsækæmæbu 0「平かまぼこ」; pissjæ 2「記帳する人, 書記」; poocjaa ~ poccjaa 2「包
 丁; 調理人」; poosi 2「箒」; pucu 2「蓬」; pusi ~ husi 2「櫛」; pusu 2「裾」;
 saaræ 2「三角蘭」; saaræ('izju) 2「鱭」; saaræmussju 2「三角蘭の莫蓆」; saaræn 0
 「悪阻」; sægi 0「鷺」; sægu 0「民謡などに加える自己流の強弱や装飾音」; sæihu 2「家
 具職人などのように細かい細工をする人」; sækkui 2「つむいだ糸を入れておく箱」;
 sæn 2「棧」; sænmin 2「計算」; sænsæn 0「蟬の総称」; sænsin 0「三味線」;
 sæpumæi 2「うるち米」; sætæ 2「噂; 便り」; sæzi 2「手拭, 鉢巻」; sibidæ 0「殻ばかり
 で実のない粃」; sici 2「季節」; sicjuu 2「イスズミ(魚)」; sidiguru 2「抜け殻」;
 sidikungæ 2「孵化に近い卵」; sidiræn 2「ダニの一種」; siiba(a)ri 2「乳離れ」; siisi 2
 「煤」; siizæ 2「年上」; siki ~ hikki 2「月」; sikitæci ~ hikkitæci 2「朔」; simækoo 2
 「板香」; simæmuni 2「方言」; simænaa 2「からし菜」; simænægi 0「島ほどたくさん」;
 simidenku [古] ~ simidenko [新] 2「ツルソバ」; sin 2「キビ」; sin 2「祝い
 に出席する客」; sin 2「栓 (zjoo より小さい)」; sinækkubi 2「藁縄の帯」; sinin 2
 「瘤」; sino 2「目の細かい篩」; sinu 2「昨日」; siruzuusi 2「雑炊」; situ 2「お土
 産」; situûti 2「朝 (6時から8時ごろまで)」; sjaa 2「茶」; sjaaui 2「茶請け」;
 sjaaazingiru 2「茶筒」; sjaku 2「風の張り糸」; sjatto 2「仏前にお茶を供えること」;
 sjeeroo 0「蒸籠」; sjokki ~ sjokkêê 2「口笛」; sjongæ 2「生姜」; sjoomunu 0「本
 物」; sjubæi 2「尿」; sjukkæ 2「急須, 土瓶」; sjunæi 2「和え物」; sjunæi 2「しま
 だこ」; sjuu 2「梅雨」; sjûu 2「心」; sjuuikii 2「モンパノキ(植)」; sjuuru 0「棕
 櫚」; sjuuruzinæ 0「棕櫚で縛った綱」; ssahu²⁴ 0「仕事」; ssipæn 2「後ろ足」;
 ssiru 2「煙管」; ssje 2「白髪」; ssjuæi 2「白蟻」; ssjukæmæbu 2「白かまぼこ」;
 subættæræð 2「燕」; subihuni 2「尾骶骨」; subikkjæ 2「おむつ」; subu 0「急所」;
 subu 0「壺」; sumiæræn 0「爪下血腫」; sumui 0「つもり」; suncun 0「膀胱」;
 sungōð 2「細工用・鉛筆削りの小刀」; suni 2「脛」; sunuru 0「もずく」; surasi 2「サ
 ルカケミカン」; suru 2「キビナゴ」; surudæi 2「釣竿」; surukaasuhitu 2「キビナ
 ゴ売り」; surungucci 2「搗り粉木」; suu 2「巢」; suzuruttæ 2「結納の供え物」;
 tãä 2「一人」; tãämunu 2「独り者」; tãðsi 2「魂」; taazin 2「高い脚のついた膳」;
 tæbiki 2「オオバギ(植)」; tæi 2「背丈」; tæi'nmæ 0「竹馬」; tæja 2「忍耐力」;

təku 2「蛸」; təmən 0「フエフキダイ」; təməsi 0「分け前」; təmunu 2「焚き木」;
 təmunuturi 2「焚き木採り」; tənədui 2「種子取祭」; tēndaarə 0「炭俵」; tangu 2「担
 桶」; tangu 0「^{すすき}薄編みの木炭入れ」; tangurōō 2「薄編みの木炭入れ（子供言葉）」;
 tənka 0「向かい合っている状態」; tənka 0「満一歳」; tēnkajoi 0「満一歳の祝い」;
 tēperāā 2「トベラ（植）」; tēpunə 0「長命草」; tērəhu 2「蓋付きの皿」; tēru 2「樽」;
 tərutēru 0「誰（複数）」; teenee 2「加勢」; tinoorjə 2「アキノノゲシ（植）」;
 toohu 2「豆腐」; toohuməmi 2「大豆」; toonəcci 2「ハスノハギリ（植）」; toorə 2「台
 所になっている棟」; toorəhəbu 2「サキシマスジオ（蛇）」; tooraicjoo 0「共同作業や
 お祝いのために贈られた物品を記録する帳」; toosinbəi 2「おたふくかぜ」; tooti 2「全
 部」; toozə 2「田草」; toozə(izju) 0「ニセカンランハギ（魚）」; tugə 2「罰」;
 tukubərə 0「床柱」; tumu 0「艫」; tumujaa 0「渡し舟の屋根つきのところ（乗客が
 座るところ）」; tunəi 0「隣」; tūndəcibii 2「^{ぞんきょ}躊躇」; tunzjəku 2「看病」; turubəri 0
 「ぼうっとしている様子」; turukki 2「種子取祭の初日」; uciəmi 2「屋内に降り込む
 雨」; ucisii 2「打ち身」; ucugumi 2「協力し合うこと」; ujəkkijaa 2「裕福な家」;
 untu⁵⁶ 2「生活の知恵, 常識」; urəndəssə 2「セイロンベンケイ（植）」; uru'isi 0「珊
 瑚」; uruzun 0「初春」; usəi 2「酒肴」; usidāā ~ usidəā 0「^{てんかん}癲癇」; usinabii⁵⁴ 2「藺
 草の一種」; usjon 2「後頭部」; uzu 2「ウツボ（魚）」; zaarəki 2「ヤンバルアカメ
 ガシワ（植）」; zaatuku 2「床の間」; zii 0「(藁の) 芯」; zin 0「膳」; zincinnaa 2
 「セッカ」; zingərəsjəā⁵⁷ 2「サザエの蓋, おはじきの玉」; zingiru 2「金属製の筒」;
 zirəbə 2「労働歌」; ziri 2「どれ」; ziru 2「小さな珊瑚礁」; zjəko 2「アイゴの稚魚」;
 zjoo 2「栓」; zuuki 2「梯梧」; zuusi 2「炊き込みご飯」;

地名（アルファベット順）

əkəjāā 0「赤山丘」; həsəā 2「玻座間」; hətirōō 0「波照間」; hətōō 2「鳩間」;
 hunəuki 2「船浮」; inəsi 0「石垣」; iruūti 0「西表」; isjāākuci 2「竹富の北岬の東
 方の土地」; jāā 0「八重山」; jubu 2「由布島」; junon 0「与那国」; kəbirə 2「川
 平」; kəjəmə 2「嘉弥真島」; kondoi 0「コンドイ浜」; kumāā 0「小浜」; kun 2「古
 見」; meeku 2「宮古」; meerə 2「宮良」; naazi 2「仲筋」; nəhə 2「那覇」;
 nubəru⁵¹ 2「野原（竹富島北部）」; pənəri 2「新城」; pucjəā 2「黒島」; ssjəbu 2「白
 保」; təiwən 2「台湾」; tərəmə 2「多良間」; teedun 2「竹富」; tunukku 2「登野
 城」; usinaa 2「沖縄」;

動詞（アルファベット順）

aar(ir)un 2「慌てる, はしゃぐ」; əbəttirun 0「慌てる, 急ぐ」; əbirun 0「溢れる」;

əbirun 0「浴びる」; əcōōrun 2「集まる」; əirun 2「和える」; əzikaarun 2「もつれる」; baarun 2「解る」; bəcjarun 2「騒ぎ立てる」; bənkəsun 2「投げる」; bəppəirun 2「間違える」; bərəsun 2「(動物を)解体する」; bəssəsun 0「(動物を)解体する」; bəziro(o)n 0「(動物を)解体する; 説教する」; biirun 2「酔う」; bizərun 0「歩けなくなって坐り込む」; dəkkun 2「歌う」; dərukkirun 2「尻を地面に付けて坐る」; dəttirun 2「団子やおにぎりにするために芋などを潰す」; dugerun 2「わめく」; ettirun 0「熟して落ちる」; gaasun 2「縄を撚り合わす」; gənaarirun 2「くたびれる」; həjərun 2「(風邪が)流行る」; hənərəsun 2「離す」; həron 2「払う」; hikkəsirun 0「招待する」; hikoōrun 0「準備する」; hissjun 2「(潮が)引く」; hitədərirun 2「ずぶ濡れになる」; hoiccjaasun 0「食い散らす」; hoirun 0「浮かぶ」; huccəsun 2「沸かす」; hukiaarun 2「吹き零れる」; hukirun 0「通り抜ける」; hun 0「閉める」; hunmerun 2「(蠅が)たくさん集まる」; huroon 0「開く」; hututtirun 2「朽ちる」; hututtirun 2「ぶつぶつ煮える」; imirun 2「ねだる」; jənəngo(o)run 2「濁る」; jətun 2「移植する; 雇う」; judirun 2「茹でる」; juttaarun⁵⁸ 0「横たわる」; juun 2「休む」; juuzirun 0「寄る」; kaasun 2「焙る」; kaazirun 2「引つ搔く, 齧る」; kəiccjaasun 2「書き散らす」; kəjun 0「通う」; kakkər(ir)un 2「飢える」; kəməirun 2「身構える」; kəruirun 2「願い事を叶えてくれる」; kəsəirun 0「重ねる」; kətəədsun ~ kətəməsun 2「無理に傾ける」; kətəirun 2「担げる」; kətəngaasun 0「捻挫する」; kəziisungirun 2「どこに隠したかを忘れる」; kizirun 0「削る」; koodəirun 2「抱っこする」; koodon 2「抱っこする」; kubəirun 2「節約する」; kujəmirun 2「礼拝する」; kunumun 2「計画する」; kurəsun 0「殴る, 殺す」; kurubun 0「転ぶ」; kusəirun 0「(丁寧に) 拵える」; kuurirun 2「崩れる」; kuurirun 2「零れる」; kuusun 2「零す」; kuusun 0「根こそぎ引き抜く」; kuzirun 2「^{くすぐ} 擦る」; maasun 0「回す」; mərəkkirun 0「束ねる」; məsəirun 2「邪魔をする」; migirun 0「根菜類が稔る (歌謡語)」; miirun 0「根菜類が稔る」; mingurun 0「^{めまい} 眩暈がする」; mudirun 2「ねじる, ひねる」; muirun 0「老眼で物の形がぼやける」; mungeerun 0「蒸し暑い」; nəər(ir)un 2「切れ味が落ちる」; naasun 0「泣かす」; naasun⁵⁸ 2「流す」; ncasun 2「満たす」; ncirun 2「(潮が) 満ちる」; neirun 0「差し出す, 召し上がる」; nettirun 2「抜ける」; niirun 2「捏ねる, 練る」; nnmun 2「紡ぐ」; noorun 2「治る」; noorun 2「稔る」; nubirun 2「伸びる」; nubirun 2「湯に水をさして薄める」; nuurun 0「登る」; oon 2「喧嘩する」; pəirun 0「接ぎ合わせる」; pəirun 2「二つに切り割る」; peekirun 0「^{つまづ} 躓く」; pidoomun 0「へこむ, 窪む」; pigun 2「薄く削る」; pingirun 2「逃げる」; pinguirun 2「体が冷え込む」; pisjəngəsun 0「平手打ちする」; pjōōrun 2「隠れる」; pucun 2「干す」; saasun 2「二

つに裂く」; sǣdurun 0「(指を動かして) 触る」; sǣdurun 0「日が暮れて暗くなる」;
 sǣmirun 2「(色が) 褪せる」; sǣngun 0「引きずる, 引っ張る」; sǣron ~ sǣrǣrun 0「浚
 える」; sibirun 0「しゃぶる」; sidirun 2「孵化する; 脱皮する」; siidəsun 0「めか
 しこむ」; sīirun 2「(顔を) 洗う」⁵⁹; sinon 0「つなぎ合わせる」; sinun 0「注ぐ, そ
 そぐ」; sizjǣðr(ir)un 2「縮む, 縮こまる」; soon 0「咲く」; soorun 0「ヘラで草取
 りなどをする」; sson 0「(穴を) 塞ぐ」; ssun 0「すする」; ssurun 0「拭く」;
 subun 0「(風が) かなり強く吹く」; sugasun 0「(風に) あてる」; sukuccaasun 0「解
 体して使えなくする」; tǣbuirun 0「蓄える」; tǣdirun 0「温湿布する」; tǣmirun 2
 「真っ直ぐにする」; tǣngirun 0「沸騰する」; tǣrirun 2「溶かす, (酒・醤油を) 作る」;
 tǣtəmun 2「畳む」; tikkumun 2「握りしめる」; tōðrǣrirun 2「頂く」; toorirun 0「倒
 れる」; tōðrun 2「下さる」; tudōðrun 2「ひどい目に遭う」; tumǣrun 0「泊まる」;
 turirun 0「風が風ぐ」; turukkirun 2「言い付ける」; uccjaasun 2「ぶつかる」;
 udǣirun 2「疲れきってのびる」; ukurun 0「起こる」; usubəsun 0「伏せる」;
 utirun [古] ~ ukirun [新] 0「竈から鍋を下ろす」; uumun 2「泳ぐ」; uzirun 2「感
 心する」; zǣðdurun 2「慌てふためく」; zaarirun 0「朽ちて虚になる」;

形容詞 (アルファベット順)

ǣbǣttǣrisǣn 0「脂が多い」; ǣbunesǣn 0「危ない」; ǣhwǣsǣn 2「塩気が足りない」;
 ǣijǣssǣn 2「そそっかしい, 危なっかしい」; ǣpǣresǣn 2「かわいい (人だけ)」;
 ǣzǣisǣn 2「清潔である」; baisǣn 2「おかしい, 恥ずかしい」; bitturisǣn 0「油っこい」;
 bjuusǣn 2「痒い (koosǣn ほど痒くない)」; daasjǣn 0「立派である (生き物だけ)」;
 gǣðrǣsjǣn 0「悲しい」; gaazjuusǣn 2「我が強い」; gǣnzjuusǣn 2「健康である」;
 giizjuusǣn 0「気が強い」; gumǣsǣn 0「小さい」; gurusǣn 2「不安定である」;
 haasǣn 0「明るい」; hǣccjǣsǣn 0「すばしっこい」; hǣdǣrǣsǣn 2「機敏である, いた
 ずらっぽい, 女好き」; ha(a)goosǣn 2「ずるい, いやらしい」; hǣisǣn 2「はやい」;
 hǣisǣn 0「明るい」; hǣntǣsǣn 2「忙しい」; heegosǣn 0「大層大きい・多い」;
 heerǣsǣn 2「様子がおかしい」; higosǣn 2「すごい (物だけ)」; hikǣsǣn ~ hikǣrǣsǣn 2
 「寂しい」; hirusǣn 2「珍しい, 不思議である」; hirusǣn 2「広い」; hjoorǣsǣn 2「滑
 稽である」; hoizjuusǣn 0「食い気がある」; hoorǣsjǣn 0「ありがたい, めでたい」;
 hoosjǣn 2「恐れ多い」; hukoorǣsǣn 0「ありがたい, めでたい」; hukurǣsjǣn 0「あり
 がたい, めでたい (歌謡語)」; husjǣn 2「欲しい」; isjaasǣn 2「少ない」; isugǣssǣn 2
 「忙しい」; jǣ(ǣ)rǣsǣn 0「柔らかい」; jaasjǣn 2「ひもじい」; jǣhwǣrǣsǣn 0「病弱
 である」; jǣnesǣn 2「汚い」; jǣsjǣn 0「貧弱である, 劣っている」; jǣssǣsǣn 2「小便
 臭い」; joosǣn 2「弱い」; jukusǣn 2「欲深い」; kǣbusjǣn 0「香ばしい」; kǣcjǣðsǣn 0

「邪魔になっているさま」; kəisən 2「美しい, 清潔である」; kənəsən 0「(恋人か近親が) かわいい」; kəttəsən 0「密である」; kəzjusən 0「風が強い」; kiccəsən 0「厳しい」; kiihəisən 0「気が速い」; kinəsən 2「憎たらしい, 貧しい」; kjūūsən 0「煙たい」; kooresən 2「かわいい (赤ちゃんだけ)」; koosən 2「硬い」; koosən 2「痒い, くすぐったい」; kubəsən 2「仲が悪い」; kucisən 0「苦しい, つらい」; kuusən 0「小さい」; kuusən 0「貧しい」; məisjən 2「眩しい」; mərusən 0「短い, 低い; 丸い」; misjən 2「良い」; mizirəsən 2「珍しい」; muciməsən 2「仲がいい」; nəbusən 0「すべすべしている」; ngəðsən 2「やかましい」; ngəsən 2「苦い」; nəkkəsən 2「懐かしい」; nippəsən 2「憎らしい」; nitəsən 2「残念である」; nudubjuusən 2「えぐい」; nurusən 2「ぬるい」; nussən 2「暖かい」; nuttasən 0「眠たい」; nuūsən 2「たくさんある」; nuusən 0「怖い」; nzoosən 2「(恋人か近親が) かわいい (歌謡語か)」; piiresən 2「涼しい」; pingusən 2「寒い」; pisjəsən 0「平たい」; səkusən 0「脆い」; sənisen 2「嬉しい」; sənminzjuusən 2「計算上手である」; səppusən 0「弾力性のある物が折れそうで折れないさま」; sidəsən 2「涼しい (歌謡語か)」; siĩirisən 2「弾力性のある物が噛み切れないさま」; sinəsən 2「幼い」; sindasən 2「かわいい」; sjoorəsən 2「塩辛い」; sjūūhəisən 2「気が速い」; sjuuuzjuusən 2「塩辛い」; ssəsən 2「臭い」; ssjusən 2「広い」; taasən 2「高い」; təbəsən 2「仕事に精を出さない, 怠けるさま」; uittəsən 2「心残りである」; ujəjumisən 2「恐れ多い (歌謡語)」; u(k)kəisən 2「醜い, かつこ悪い」; umussən 2「面白い」; urēisjən 2「羨ましい」; usuməsən 2「ものすごい」;

成句 (アルファベット順)

kii-nu 2 zjuu 0「木の芯」; miidōō-nu 2 sjubəi 2「薄い茶」; pən-nu 2 pisə 0「足の裏」; siici-nu 2 kungāā⁶⁰ 2「蘇鉄の実」;

以上の名詞資料の音調型は助詞付きの発音を反映するもので、動詞資料は主に「～しそうだ」の形、形容詞資料の音調型は連体形 (例えば əzəisəru jaa「清潔な家」)、「～てならない」の形 (例えば jaasjənu nərənu「ひもじくてならない」)、断定の -dəru の形 (例えば nuūsə-dəru「たくさんある」) の形の発音を反映する。Thorpe (1983: 150) は竹富島方言の形容詞語幹は無アクセント (平板型) に変化しつつあるようであると述べているが、以上の形容詞資料はこの主張を支持しない。また、形容詞語幹が重複してできた重複形容詞は、もとの語幹が平板型であろうと起伏型であろうと、その音調はすべて起伏型になる。ただ、普通の起伏型音調の二拍目まで高い音調型 (平山ほか 1967: 42-5; 久野 1990: 115; 小川 2011) と異なり、重複形容詞は重複形の第一成素の直後で音調が下降する。

単純形容詞	重複形容詞（連体形）
guməsən 0「小さい」	gumaaʔguma-i-ru
taasən 2「高い」	taaʔta-i-ru
pisjən 0「薄い」	pisiiʔpisi-i-ru
daasjən 0「立派である」	dasiiʔdasi-i-ru
hukurəsən 0「めでたい」	hukuuʔhuku-i-ru
hukoorəsən 0「ありがたい」	hukoraaʔhukura-i-ru
nəbusən 0「すべすべしている」	nəbuuʔnəbu-i-ru
sindasən 2「かわいい」	sindaaʔsinda-i-ru
heerəsən 2「様子がおかしい」	heraaʔhera-i-ru
hjoorəsən 2「滑稽である」	hjoraaʔhjora-i-ru
higosən 2「すごい」	higooʔhigo-i-ru
mərusən 0「丸い」	məruuʔməru-i-ru「大きくて丸い」
jəhwərəsən 0「病弱である」	jəhwəraaʔjəhwəra-i-ru
	mikkooʔmikko-i-ru「丁寧、慎重である」

謝辞

本稿の竹富方言資料はすべて竹富島^{はごま} 玻座間出身の崎山三郎氏（1934年生）の発音を反映するものである。崎山氏とは 2017年7月19日から2018年1月3日の間に計20回の一回一時間ほど面接調査を重ねて来た。氏に対して心より深く感謝する。

他の方言の言語資料をご教示下さった方々の名前は注の中で挙げたが、諸氏に厚くお礼を申し上げる。また、本誌の匿名の査読者には本稿の改善に有益な助言をいただいたことに対してあわせて謝意を表する。

注

- ¹ 日本祖語の *e が日本中央語の i になることについては服部（1979：113-6）が参考になる。
- ² 富山萬壽喜氏による教示（2017年8月21日調査）。
- ³ 富山萬壽喜氏による教示（2017年8月22日調査）。
- ⁴ 故宮城信八氏による教示（https://www.researchgate.net/profile/Wayne_Lawrence2/publications?category=data 参照）。
- ⁵ 中澤光平氏からの私信（2017年12月28日）。
- ⁶ 宮良祐成氏による教示（2017年11月28日調査）。
- ⁷ 赤嶺初氏による教示（2017年11月28日調査）。

- ⁸ 下地賀代子氏による教示（2017年12月25日）および青井隼人氏からの私信（2018年3月4日）。
- ⁹ 昭和14年と22年生まれ的女性による教示（2018年4月7日調査）。
- ¹⁰ 同様な音位転換の例として、英語の pedestrian「歩行者」が tebestrian になるという言い間違いが挙げられる（Fromkin 1973：253）。
- ¹¹ 糸満方言のように、k が口蓋化の順行適用をうけない方言では *zikasi が予想される。しかし、糸満方言では「虱の卵」は siran-nu kuga という（上原謙氏からの教示（2018年4月3日））。
- ¹² *w > g の硬音化は北テペワン語（Northern Tepehuan）（Haugen 近刊：17）などに見られる。沖縄の久高方言では a 以外の母音の前の語頭の *w は g に硬音化する。
- ¹³ 伊良部島佐和田の「人ガ死ネバ死躰ヲ家カラ出シテ後、スグ mani 又ハ gisici（薄）ノ枝ヲ門ニ掛ケル習慣ガアル。其ノ枝ヲ fūgi ト云フ。是ハ死霊ガ戻ラヌ為メノマヂナヒナリト云フ。」（ネフスキー 2005：173）が報告されている。意味の違い（他方言のフキは呪いの要素はない）と二音節目の子音の違いはあるが、同系語である可能性はある。
- ¹⁴ 脇田スエ氏（1937年生、2017年12月28日調査）および竿田富夫氏（1935年生、2017年12月29日調査）による教示。直接本人からは聞いていないが、1947年生まれのある話者は本来の huki の意味はご存じないというが、huki tatiri の形で、婚前の女性にツバをつけるという意味で使われるという。なお、横山晶子氏がこの単語を80代の話者一名と70代の話者一名から huci（A系列対応音調）の形で聞き取っている（横山晶子氏からの教示（2018年2月23日））が、これは話者が「ほら穴」（他の島では「崖」）を意味する A 系列音調の *poki と混同した結果であると思われる。
- ¹⁵ 2017年8月31日に南城市志喜屋漁港で漁師から聞き取り。意味は「礁嶺の外淵部にある外海に通じる深い穴」（渡久地 2017）である。
- ¹⁶ ヤチなどの語形はアイヌ語からの借用語であるという説が有力視されがちであるが、これへの反論（山田 1998：47-49）は説得力がある。
- ¹⁷ 谷治正孝（2000：31）は『地図で見る日本地名索引』に基づいて、「ヤツ」地名の「最西端は山口県玖珂町の谷津上、谷津下である」と述べているが、熊本空港が所在する益城町おやつ小谷の方が西にある。
- ¹⁸ 2017年10月20日に行った臨地調査による。
- ¹⁹ 平山ほか（1992a：1663）による。2017年10月21日に臨地調査で確認した。
- ²⁰ 加治工真市先生による教示（2017年12月13日）。
- ²¹ 石崎公曹氏による瀬留方言の辞書の草稿（琉球大学法文学部蔵）。
- ²² 明らかに本土日本語の影響だと断言できる例として竹富方言の tətəmun 2「畳む」が挙げられる。琉球語は *takub- A（石垣 tahumun A, 平良 tapugi, 首里 takubun A,

- 大和浜 takuburi) であるが、竹富方言の語形は本土日本語系の tatam-系の語形である。
- ²³ 富山萬壽喜氏による教示 (2018年4月7日調査)。
- ²⁴ ローレンス (2013) では 2 (起伏型) としたのをここで訂正する。
- ²⁵ Aso (2010 : 211, 212) では「山羊」は pīmiza として掲げられている。平山 (1988) のほかに宮良 (1930 : 212), 加治工 (1975 : 7), 中本 (1981 : 139) が pimiza と記録していることから、pīmiza は波照間で比較的最近できた新しい発音ではないかと考えられる。
- ²⁶ 通説ではヤギは1609年の薩摩の琉球侵攻以降に奄美諸島に入った移入語である (中本 1981 : 138)。五十嵐 (2016b) は *jagi を琉球祖語形として再建するが、その根拠は不明である。
- ²⁷ 中本 (1981 : 138) は琉球祖語形を *piⁿpiⁿta (= *pibida) と再建している。だが、沖縄方言の祖語で母音間の b が p になったと考えるより、その逆の方が自然な変化 (同化) であると思われる。また、五十嵐 (2016b) は琉球祖語形を *penda C としているが、沖縄方言における有声子音の前の *-N- > *-pi- や八重山方言における *-N- > *-bi- という音変化より、その逆の方が自然ではなからうか。
- ²⁸ 同様の变化は金武町屋嘉方言の kakasu と金武町金武方言の kasusu (ともに「海栗」の意) の関係を説明する。*kasuʔ > kaʔsu の変化があったと思われる (Lawrence 2006)。
- ²⁹ 岡村隆博先生からの私信 (2018年2月)。
- ³⁰ 青井隼人氏からの私信 (2018年3月4日)。
- ³¹ 八重山の平民宅の「庫裏」(竹富, 石垣, 鳩間 kuuru) は建物や部屋ではなく、母屋の三番座の裏の部屋の隅にある、戸の付いていない甕置き場である。
- ³² NNUN にあるような非語源的な N で終わる単語は与那国方言 (c'inan「砂」, kanin「金属」, sibān「心配」, tidān「太陽」— 以上すべて上野 (2010) から) や波照間方言 (fumon「雲」, min「目」, minan「貝」, nin「根」, nman「馬」, pan「歯」, paton「鳩」, pin「屁」— 以上すべて麻生・小川 (2016) から) の特徴のように考えられがちであるが、数は少ないが他方言にも同様な現象は見られる。南琉球では小浜島の biin「溝」, maccjaan「女性用褌」, tooraan「影」(仲原 2004 : 268, 272, 273), 鳩間方言の pazin「蜂」(加治工 1961 : 36; 平山ほか 1992a : 1311), 竹富島方言 irəN「水母^{くらげ}」、また北琉球にも沖永良部島国頭 noozin「虹」(松森 2000 : 67), 同 正名 nabiran「糸瓜」(松森 2000 : 67), 旧笠利町佐仁 eezan「蜻蛉」(狩俣 2003 : 32), 旧笠利町全地点 tīdan/teḍan「太陽」(上野 1996a : 158) の例がある。
- ³³ 下地賀代子氏による教示 (2017年10月)。
- ³⁴ 多良間方言の語形 cikeusi (平山 1983 : 502; 下地 2017 : 196), cikiusi ~ cikiosī A (青

- 井隼人氏からの私信 — 2018年3月4日）はなお考察を要する。
- 35 仲里政子氏（大正12年生まれ）を含む4名の首里方言話者はもっぱら adaasun を使い、
udaas (j)un は聞いた憶えがないという（2018年4月4日の本人たちからの教示）。
- 36 アクセントはこの三地点を2018年4月2日に臨地調査した時にうけた教示による。
- 37 伊是名方言では、本来 b-終わりの動詞語幹は、未然形に w、終止形に n が現れる（例
えば asinun 「遊ぶ」、musinun 「結ぶ」、tunun 「飛ぶ」）。
- 38 浜川正喜氏（昭和5年生まれ）による教示（2018年4月5日調査）。
- 39 『京言葉』資料室 a-12「3拍5段動詞分類表」（<http://www.akenotsuki.com/kyookotoba/shiryoo/bunrui/dooshi35.html>）。
- 40 旧名瀬市芦花部（上野 1996b : 49）、沖永良部島正名・国頭（松森 2000 : 67, 68）、与
論麦屋東（菊・高橋 2005 : 418）、多良間（松森 2010 : 500）、与那国（上野 2013 :
118）にある *pagi の対応形はすべてC系列音調である。麻生・小川（2016 : 112, 114）
はパギ系の語形をB系列として掲げているが、これは漢字表記に惑わされたためにB
系列のアシと混同したことによるとと思われる。
- 41 昭和14年と22年生まれの女性による教示（2018年4月7日調査）。高平音調である。
- 42 音調は富山萬壽喜氏による教示（2017年8月22日調査）。
- 43 音調は昭和2年生まれの女性による教示（2018年4月5日調査）。
- 44 『類聚名義抄』（法下118, 122）では 低低高音調である。
- 45 同じ一連の変化が「拾う」の例にも見られる — 平良, 長浜, 多良間 pisuu, 池間 ssui（平
山 1983 : 878-9）。
- 46 『辞典』では sugurun を「竹や棒などで殴る」と定義づけているが、インフォーマン
トは、棒でなら sugurun は不適切で、代わりに dattirun 2 を使うべきだという。
- 47 原田走一郎氏からの私信（2017年12月6日）。
- 48 下地賀代子氏による教示（2017年12月25日）。
- 49 「十一月」の naakki が旧暦9月の名称「長月」に由来する（『辞典』732頁）ことから、
「十二月」の kənəkki は旧暦の翌月の名称である「神無月」に遡ることは容易に推測で
きる。
- 50 『辞典』では語頭母音は āā になっているが、ǎǎ が正しい。
- 51 『辞典』では a になっているが、ǎ である。
- 52 『辞典』には 0（平板型音調）とあるが、起伏型である。
- 53 『辞典』には 2（起伏型音調）とあるが、平板型である。
- 54 『辞典』では ǎ になっているが、a である。
- 55 『辞典』651頁には pai-nu kkə「鋤の柄」が挙がっているが、鋤の柄は長いものなので
kkə は不適切で、gii を使うべきであるとインフォーマントはいうし、『辞典』903頁の

ヒカの記述もこれに合う。

- ⁵⁶ この単語は鳩間方言の umukutu B・C (加治工真市先生による教示), 石垣方言の unkutu A 「思慮・分別」(宮城 2003: 179-80), 与那国方言の umu[g]utu B 「常識。知識」(池間 1998: 62; 中澤光平氏からの私信) や宮古諸方言の umukutu 「思慮。常識。智恵」と同系の語形と思われる。
- ⁵⁷ 『辞典』では語末母音は āā になっているが、āā が正しい。
- ⁵⁸ 『辞典』では -āā- になっているが、-aa- である。
- ⁵⁹ 『辞典』(504頁)では simirun 「(手や顔などを) 洗う」とあるが、手足は simirun の替わりに aron 2 を使用すべきであるという。
- ⁶⁰ 「木の実」は kunkāā であるが、蘇鉄の実に限って kungāā が使われるという。

参考文献

- 麻生玲子・小川晋史 2016. 「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」『言語研究』150: 87-115.
- 天野鉄夫 1979. 『琉球列島植物方言集』那覇: 新屋図書出版.
- 五十嵐陽介 2016a. 「琉球語を排除した「日本語派」なる系統群は果たして成立するのか? — 「九州・琉球語派」と「中央日本語派」の提唱 —」国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本言語学史の光と影」第3回共同研究会(8月30日: 於国際日本文化研究センター(京都))
- 五十嵐陽介 2016b. 「日琉語類別語彙 第4版」(2016年9月22日版)
- 五十嵐陽介 2016c. 「日本語・琉球語アクセント研究のための調査票「日琉語類別語彙」の仕様と利用法: 琉球語研究者に「日琉語類別語彙」を使っていただくために」九州大学・一橋大学合同合宿/(琉球)諸語記述研究会 発表原稿(9月24日: 於九州大学)
- 五十嵐陽介 2016d. 「名詞の意味が関わるアクセントの合流 — 南琉球宮古語池間方言の事例 —」『音声研究』20. 3: 46-65.
- 池原 弘 2004. 『私の金武方言メモ』私家版.
- 池間 苗 1998. 『与那国ことば辞典』私家版.
- 石垣金星・嵩原建二・花城良廣・加治工真市 2001. 「西表島・鳩間島及び新城島における動植物の方言名について」『西表島総合調査報告書』35-59. 沖縄県立博物館.
- 伊是名島方言辞典編集委員会(編) 2004. 『伊是名島方言辞典』伊是名島教育委員会.
- 岩倉市郎 1977 [1941]. 『喜界島方言集』東京: 国書刊行会.
- 上勢頭 亨 1976. 『竹富島誌 民話・民俗篇』東京: 法政大学出版会.
- 植村雄太郎(編) 2001. 『種子島方言辞典』東京: 武蔵野書店.
- 上野善道 1996a. 「奄美大島笠利町諸方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法

- 研究』24：149-261.
- 上野善道 1996b.「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15：3-68.
- 上野善道 1999.「沖永良部島諸方言の体言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』27：131-263.
- 上野善道 2002.「喜界島小野津方言のアクセント調査報告」『琉球の方言』26：1-15.
- 上野善道 2005a.「沖永良部島方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』29：1-40.
- 上野善道 2005b.「沖永良部島方言のアクセント資料(2)」『アジア・アフリカ文法研究』33：155-204.
- 上野善道 2006a.「沖永良部島方言のアクセント資料(3)」『琉球の方言』30：1-49.
- 上野善道 2006b.「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(4)」*Asian and African Languages and Linguistics* 1：129-58.
- 上野善道 2006c.「沖永良部島方言語彙のアクセント資料(5)」『東京大学言語学論集』25：249-297.
- 上野善道 2010.「琉球与那国方言のアクセント資料(1)」『琉球の方言』34：1-30.
- 上野善道 2013.「琉球与那国方言体言のアクセント資料(2)」『琉球の方言』37：109-42.
- 上野善道 2015.「琉球与那国方言体言のアクセント資料(4)」『琉球の方言』39：165-93.
- 小川晋史 2011.「南琉球八重山竹富島方言のアクセントとイントネーションについて」第6回音韻論フェスタ（2月17日：於大津市）
- 屋村喜治 2013.『語り継ごう ^{くとうば ユスイグトウ}しまぬ方言・教訓 ^{いついがでいん}何時までも』私家版.
- 長田須磨・須山名保子（編）1977.『奄美方言分類辞典 上巻』東京：笠間書院.
- 長田須磨・須山名保子・藤井美佐子（編）1980.『奄美方言分類辞典 下巻』東京：笠間書院.
- 生塩陸子 2009.『新版 沖縄 伊江島方言辞典』伊江村教育委員会.
- 加治工真市 1960.「八重山鳩間島方言」琉球大学レポート 7月3日.
- 加治工真市 1961.「鳩間方言の音韻体系について」『琉球方言』3：3-55.
- 加治工真市 1975.「語彙」『波照間の方言』11-30. 沖縄県文化財調査報告書 第3集. 那覇：沖縄県教育委員会.
- 加治工真市 1984.「八重山方言概説」『講座方言学 10』289-361.
- 加治工真市 1986.「鳩間方言の漁業語彙」『琉球の方言』10：1-24.
- 加治工真市 1987.「八重山方言の比較音韻論序説」琉球方言クラブ30周年記念会（編）『琉球方言論叢』93-117.
- 加治工真市 1991.「鳩間方言の住関係語彙」『琉球の方言』15：51-106.
- 加治工真市 1992.「鳩間方言の祭祀関係語彙(2)」『琉球の方言』17：61-87.
- 加治工真市 1995.「鳩間方言の人体関係語彙(1)」『琉球の方言』18・19：215-26.

- 加治工真市 1998.「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学』10：265-320.
- 加治工真市 2001.「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学』13：1-101.
- 加治工真市 2012.「続古見方言の基礎語彙」『琉球の方言』36：29-59.
- 加治工真市 2013.「続古見方言の基礎語彙(2)」『琉球の方言』37：87-107.
- 加治工真市 2014.「続古見方言の基礎語彙(3)」『琉球の方言』38：157-78.
- 加治工真市 2017.「《鳩間口説》の変遷」『竹富町史だより』39：11-21.
- 狩俣繁久 1996.「鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍方言のフォネーム（下）」『日本東洋文化論集』2：1-57.（琉球大学法文学部紀要）
- 狩俣繁久 2003.『奄美大島笠利町佐仁方言の音声と語彙』「環太平洋の『消滅に瀕した言語』に関する緊急調査研究」成果報告書 A4-014.
- 狩俣繁久 2008.『琉球八重山方言の比較歴史方言学に関する基礎的研究』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書.
- 狩俣繁久・上村幸雄 2003.『石崎公曹の奄美のことわざ』「環太平洋の『消滅に瀕した言語』に関する緊急調査研究」成果報告書 A4-016.
- 菊 千代・高橋俊三 2005.『与論方言辞典』東京：武蔵野書院.
- 喜舎場兼美 1981.「石垣市川平の葬制・補遺」『南島研究』22：56-9.
- 甲 東哲 1987.『島のことば 沖永良部島』鹿児島：三笠出版.
- 木部暢子（編）2013.『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 八丈方言調査報告書』国立国語研究所.
- 金田一春彦 1974.『国語アクセントの史的研究 — 原理と方法』東京：塙書房.
- 城辺町史編纂委員会（編）1990.『城辺町史 第五巻 民話編』
- 城間字誌編集委員会（編）2003.『城間字誌 第三巻「城間の方言」』浦添市城間自治会.
- 久野 眞 1988.「西表島租納方言の音韻体系」『琉球の方言』13：72-90.
- 久野 眞 1992.「新城下地島方言の音韻」『南琉球新城島の方言』36-66. 國學院大學日本文化研究所.
- 久野マリ子 1990.「アクセント」『琉球竹富島の方言』77-116. 國學院大學日本文化研究所.
- 国立国語研究所（編）1963.『沖縄語辞典』東京：大蔵省印刷局.
- 小松元比出（編）1977.『土佐 葦生方言辞典』高知：土佐民俗学会.
- 重野裕美 2011.『奄美諸島方言敬語法の記述的研究』未刊博士論文. 広島大学.
- 下地賀代子（編著）2017.『たらまふつ辞典 — 多良間方言基礎語彙 —』多良間村教育委員会.
- 上代語辞典編修委員会（編）1967.『時代別国語大辞典 上代編』東京：三省堂.
- 高橋俊三 1987.『琉球の方言』12号.
- 高橋俊三（編）1990.「加計呂麻島方言の語彙（中間報告）」『鹿児島県大島郡瀬戸内町調査報告書(5) — 地域研究シリーズ No. 14』65-201. 沖縄国際大学南島文化研究所.

- 高橋俊三 1993.「多良間方言の語彙（中間報告）」『多良間島調査報告書(1) — 地域研究シリーズ No. 19』73-164. 沖縄国際大学南島文化研究所.
- 高原 繁 1979.『小浜語彙』私家版.
- 寺師忠夫 1981.『奄美方言の研究』私家版.
- 土居重俊・浜田数義（編）1985.『高知県方言辞典』高知：高知市文化振興事業団.
- 渡久地 健 2017.「漁師に学ぶ海のことば 4」『沖縄タイムス』7月9日27頁.
- 徳富重成（編）1975.『徳之島尾母方言集 民俗・歴史の資料付（一集）』私家版.
- 富浜定吉 2013.『宮古 伊良部方言辞典』那覇：沖縄タイムス社.
- 富山萬壽喜 2015.『西古見のことば』私家版.
- 直江光良 1978.『奄美方言』私家版.
- 仲宗根政善 1983.『沖縄 今帰仁方言辞典』東京：角川書店.
- 仲原 穰 1997.『沖縄久米島真謝方言の記述的研究 資料編 沖縄久米島真謝方言基礎語彙一覧』未刊修士論文. 沖縄県立芸術大学.
- 仲原 穰 2002.「小浜島方言の音韻的特徴と問題点 — 概説と基礎語彙資料 —」狩俣繁久・津波古敏子・加治工真市・高橋俊三（編）『消滅に瀕した琉球語に関する調査研究』『環太平洋の言語』成果報告書 A4-019.
- 仲原 穰 2004.「八重山小浜方言の音韻」『沖縄芸術の科学』16：259-87.
- 中本正智 1978.「喜界島志戸桶方言の語彙」『琉球の方言』4：1-63.
- 中本正智 1981.『図説琉球語辞典』東京：金鶏社.
- 波平憲一郎 2004.『しまくとうば辞典』私家版.
- ネフスキー・ニコライ 2005.『宮古方言ノート 複写本（上）』沖縄県平良市教育委員会.
- 服部四郎 1979.「日本祖語について・19」『月刊言語』8.9：108-18.
- 原田走一郎 2015.『南琉球八重山黒島方言の文法』博士論文. 大阪大学.
(<http://hdl.handle.net/11094/55692>)
- 平山輝男（編著）1983.『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』東京：桜楓社.
- 平山輝男（編著）1986.『奄美方言基礎語彙の研究』東京：角川書店.
- 平山輝男（編著）1988.『南琉球の方言基礎語彙』東京：桜楓社.
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）1992a.『現代日本語方言大辞典 2』東京：明治書院.
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）1992b.『現代日本語方言大辞典 3』東京：明治書院.
- 平山輝男・大島一郎・大野眞男・久野 眞・久野マリ子・杉村孝夫（編）1993.『現代日本語方言大辞典 4』東京：明治書院.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 1967.『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院.

- 福治友邦・加治工真市 2012.『久高島方言基礎語彙辞典』(琉球の方言 特別号) 法政大学沖縄文化研究所.
- 福島光義 2010.『国頭の方言』私家版.
- 前新 透 2011.『竹富方言辞典』石垣: 南山舎.
- 前大用安 2002.『西表方言集』私家版.
- 松森晶子 2000.「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発 — 沖永良部島の調査から」『音声研究』4. 1: 61-71.
- 松森晶子 2009.「沖縄本島金武方言の体言のアクセント型とその系列 — 『琉球調査用系列別語彙』の開発に向けて」『日本女子大学紀要 文学部』58: 97-122.
- 松森晶子 2010.「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道(監修)『日本語研究の12章』490-503. 東京: 明治書院.
- 松森晶子 2011.「喜界島祖語における3型アクセント体系の所属語彙 — 赤連と小野津の比較から —」『日本女子大学紀要 文学部』60: 87-106.
- 松森晶子 2013.「宮古島与那覇方言のアクセント交替 — 3モーラのフットを持つ方言 —」『日本女子大学紀要 文学部』62: 1-21.
- 松森晶子 2016.「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み — その韻律範疇PWd と下がり目の出現条件 —」『言語研究』150: 59-85.
- 宮城信勇 2003.『石垣方言辞典』那覇: 沖縄タイムス社.
- 宮城盛孝 1966.「葬制墓制」『沖縄民俗』12: 48-55.
- 宮城信八 2000.『シマフトゥバ 大宜味村田嘉里の方言』私家版.
- 宮腰 賢・石井 正己・小田 勝(編) 2011.『全訳古語辞典 第四版』東京: 旺文社.
- 宮良當壯 1930.『八重山語彙』東京: 東洋文庫.
- 本村 満・本村洋子 2011.『みやこのことば』私家版.
- 本村 満・本村洋子 2014.『続 みやこのことば』私家版.
- 谷治正孝 2000.「地形図にみる「谷」地名と「沢」地名」『地図』38 (supplement): 30-1.
- 山田秀三 1998.『関東地名物語』東京: 草風館.
- 山田 實 1995.『与論島語辞典』東京: おうふう.
- ローレンス・ウエイン 1997.「鳩間方言のアクセント — 数詞/助数詞」『沖縄芸術の科学』9: 1-21.
- ローレンス・ウエイン 2005.「大宜味村田嘉里方言の音調体系」『琉球の方言』29: 67-85.
- ローレンス・ウエイン 2013.「竹富島方言アクセントと「系列別語彙」 — 附 竹富島方言版「北風と太陽」 —」『琉球の方言』37: 1-24.
- ローレンス・ウエイン、岡村隆博 2009.「徳之島浅間方言の俚言名詞アクセント資料」『琉球の方言』33: 173-80.

- Aso Reiko 2010. “Hateruma (Yaeyaman Ryukyuan),” in Michinori Shimoji & Thomas Pellard (eds.) *An Introduction to Ryukyuan Languages*. 189-227. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (Tokyo University of Foreign Studies).
- Bentley, John R. 2008. *A Linguistic History of the Forgotten Islands: A Reconstruction of the Proto-language of the Southern Ryūkyūs*. Folkestone, Kent: Global Oriental.
- Buck, Carl D. 1949. *A Dictionary of Selected Synonyms in the Principal Indo-European Languages*. Chicago, IL.: The University of Chicago Press.
- Fromkin, Victoria A. (ed.) 1973. *Speech Errors as Evidence*. The Hague: Mouton.
- Haugen, Jason D. 近刊. *Uto-Aztecan*. (草稿 <https://www.academia.edu/35118475/Uto-Aztecan>)
- Lawrence, Wayne P. 2006. “Sound change, abstract representations, and simplicity,” *Linguistic Inquiry* 37. 2: 346-50.
- van der Lubbe, Gijs 2016. 『琉球沖永良部語正名方言の記述文法研究』 博士論文. 琉球大学. (<http://hdl.handle.net/20.500.12000/33729>)
- Pellard, Thomas 2010. Review of “A Linguistic History of the Forgotten Islands: A reconstruction of the protolanguage of the Southern Ryukyus”, by John R. Bentley. *Diachronica* 27. 1: 170-76.
- Serafim, Leon 1984. *Shodon: The Prehistory of a Northern Ryukyuan Dialect of Japanese*. Yale University PhD dissertation.
- Thorpe, Maner L. 1983. *Ryūkyūan Language History*. University of Southern California PhD dissertation.